

849
日用文鑑

中郵清香

編輯

上下

T1A1

11

k071



a 1 3 8 0 3 2 1 2 2 2 a

福岡教育大学蔵書

子石は昔の...
...
...
...
...

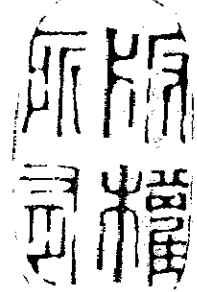
明治十七年二月新刊

每部
以此
為證



小中郵清矩
中郵秋香

編輯



日用文鑑

不二書屋藏梓

今・倭文の通聲
既一洗きまき
文・物き撰む暇も所
外毛し撰む暇の文
海はつたまのいん
主世はは己威名

海はつたまのいん
古典海名料の指す
深きもの用きあめ
世道一如の禱益
何もし信正上り
ぬき所

了月二日
 中村正直
 中村秋考棟

日用文鑑上卷目錄

緒言

凡例

紀事類

志傳 雜記
 紀行 日記

一 鸚鵡石の事を記す

伊藤東涯

二 京九村の事を記す

柳澤淇園

三 山科の農夫

雨森芳洲

四 頼朝御静を召して舞ハせらまじ事を記す

本居宣長

五 金吾中納言の事を記す

新井白石

- ⑥ 先考の行状を記す
- ⑦ 富士谷成章略傳
- ⑧ 堀保巳一傳
- ⑨ 竹中家譜
- ⑩ 壬子試筆の詞
- ⑪ 杜鵑を聞きて感あり
- ⑫ 東照宮參拜の記
- ⑬ 西北紀行
- ⑭ 天保乙未年日記

新井白石
山崎美成
中山信名
新井白石
室鳩巢
瀧澤馬琴
大田南畝
貝原益軒
瀧澤馬琴

解釋類 考證

- ① 苗字
- ② 恐悦の字義
- ③ 女の眉そり齒を深むる事
- ④ 千金帖の解
- ⑤ 茶
- ⑥ 甲乙の聲といふ事
- ⑦ 鑄錢の事
- ⑧ 尔とへの別
- ⑨ 史記秦武陽の事を釋す
- ⑩ おくり名

本居宣長
大田南畝
石原正明
澤田東江
喜多村信節
荻生徂徠
太宰春臺
富士谷御杖
伊藤東涯
屋代輪池

① 應唯の聲

本居宣長

② 山崎橋興廢の考

屋代輪池

③ 山部赤人の考

安藤年山

④ あさるほの考

小山田與清

緒言

世人の言事を筆記して日用に便し、後來の資となすもの、此
 まを文と云ふ、然れども平常言ひ交はせる言辭のまゝにて
 は、文を成し難し、爰に於て和漢の古成語をも取交へ、在來の
 例に倣ひて書出せるを、通行文、又は日用文と云ふ、此通行文
 を卑俚からば流暢は述作せんよ、我國中古以來の雅言を
 以て綴りたる、世上は所謂和文あるものを學ぶ、若くはか
 し、然れども其を學ぶ暇おれ人の、假令俗書よもせよ、假字書
 の文を只管見る時を、自ら書得らるべし、但し我國の文を、言
 辭より起りたまは、語格テニラハ活語の類を云ふ、假字遣の濫あるは文

と云ひ難し、然らば醇粹の和文おらずして、語格も整ひ、卑俗
おらざる文を作らんよ、宜しく目途とすべき書は據らず
あるべからざ、依りて客年九月中、東京大學は始めて古典
講習科を立てらま、開業の時、清矩は其趣旨を述べたる演説
中は彼科にて文章を教習するは、世の常の國學者流の所業
とハ事おはりて、彼和文と云ふ者ハ、今ふしてハ擬古の業
して、通常は行ふべくもあらねど、其をひと己たり書きおす
こと能ハば、能く今日の常行文を流暢は綴るべからざと
思ハる、よより、古書講習の餘課は、彼擬古の雅文と、今日の
通行文とを交る、書習ハをべし、但し通行文を書習ふは、

模範とあるべき近世の文を選び、印刷して生徒は授くべし
と述べたり、爾後兼務の公事繁劇あるより、少く着手
しとるのみおて、心からずもそま、打過せし、友人中邨
秋香氏も亦其從事する所の小學作文撰述の事務は因り、曾
て彼模範文選著の志あり、清矩の此舉あるを聞き、全く其意
見と適合するを喜び、即ち公務の餘暇勉めて此二卷を編輯
して、示さる、を見まば専ら字音の辭多るる文を採りおる
ら、漢文を直譯せし如くおらず、つとめて古文は近世を省き
おるら、詞遣ひ正雅あり、よくてこそ我國人の記したる通行
文と云ふべくして、和まおらば、漢まおらざる、筑良文の

謗を免るべし、依りて此書を以て即ち課業の模範とせんと欲し、更よ一二を増損し、氏と相計りて以て印刷し付する事とハおしぬ、明治十六年九月廿八日

東京大學教授小中邨清矩

凡例

本書は近代諸家の著書、筆記、及び書簡等の内より就きて、今日より行はるゝ、通用文の模範とあるべきものを選び、大様其文體を類別して、こまを編輯せ、

日用文と元來文法の事かど、旨々しく論じべき程のものゝハあらぬど、然まども既に文例をばまゝと隨て法おきよもあらざ、俗文を學ぶ者必しも其法より依るべしとよもあらざれども、其大要ハ一通り心得おきて然るべき事おきば、今其概略を本文の傍より標記して、注目する所を知らしむ、標記の例ら即ち左の如し、

と見ゆるよ何と記し、誤あらんとおもはるゝ處何よ何と

あるす但し何々ぞありけり何々こそありけるの類ハ、其誤

寫あること言を誤たざるものおまきバ、直ちよこまをけるけ

れと改め、又申せし遣せし何の類、必申し、遣し、といはでと

えあらぬも然、如きは、直ちよこまを正しおまきつ、

立つて、歸つて、と云ひ、又ハ進んで、退いてと云ふが如き、轉訛

の動辭正しくハ立ちて、歸りて、進みて、退きてといふべきハ、格別あり、

其時の人の言辭を其儘に記さん時、又ハ草紙地よて語勢を

取る處よてハ、無勢を取るよハ、例ハ藩翰譜金吾中納言の

其身ハ國ヲば、まじん罪覺えず、命あらん限ハ只もとの儘よてこそあるべし、速速よろうべをぬらるべし、候と申せ、尼

前前とある類あり、さも書くべけまど、一般の文章語よハ、俗

文といへども尚不正格よ従ひ、立ちて、進進てとやうよ書く

べきあり、作者よ依りてハ此區別をおさだ、一向よ轉訛の辭

もて書綴まるもあまど、その心をべき事おまきバ、今ハ初學の

さめよ普通の文章語よこえよる動辭の訛言と、概ね之を正

しおまきぬ、

原文假字を濫用するもの多し、こも殊よ後生を誤るべきも

のおまきバ、今ここく之を改む、

文體又ハ旨趣のふと打見てハ、解し難らんとおもはるゝ

處よハ、略注を附し、略註短きハ、本文の傍よ細書し、其稍長き

ハ釐頭ハ註記也、又處ハ依りてハ、本文の下ハ割註して示せるもあり、割註するものハ、原註と區別せんぶとめ、必編者云の三字を加ふ、

本書載る所の文、原文の上下を略するものハ(節略)と記し、上文、又ハ下文を略するものハ(上略)またハ(下略)と記し、中間數段を略するハ(中略)とし、數句を略するハ云々と記す、

引用書ハ、毎篇文後ハ細書して、之を示しぬ、但し其文ハ板本と寫本とを論ぜず、廣く異本ハ校讐し、又諸書引載る所ハ參考して、其字句異同あるものハ、純正として、模範とあまよ不足べし者ハ従ふ、其傳ふる所、彼我較甚しき異同あり、折中

して之を採るものハ、文後示すハ其各書名を以てす、

文體ハ凡そ日常須知のものハ、就きて之を大別し、即ち左の如し、

- 紀事類 志傳 紀行 雜記
- 解釋類 考證
- 論說類 訓誠
- 書簡類

本書ハ凡そ日用文の模範とあまよ不足べき者ハ、何人の作に限り、皆取りて之を修む、是その作者の和漢學者以下、稗史雜家等諸流の人物相淆雜する所以なり、さきども其作者

多くハ一時の名家ニ係るもの多、名家あるをもて修むるニ
あらざりて、模範とあるべき文ハ、おのづから名家の作ニ多
きをもて然るあり、

本書中建白文を登載せざるも然ら、抑建白の文體たる、最も
時世の治態ニ應じて變更あるものにて、古人文中觀る所の
もの、之を要するニ今の世の模範とあり難きニ似たきハ、あ
り、蓋し論說中掲ぐる所の諸家の文を熟讀せば、今日の建白
書を作るニ於てハ、筆勢自ら自在あるべし、
本書ニ修むるもの、外、模範とあるニ足るべき文章、固より
鮮らざるといへども、此書卷數限あるをもて、今多くハ省き

つ、暇あらば後日を期して尚ほ續編を繼輯をべし、

中邨秋香

日用文鑑上卷

小中村清矩

中邨秋香

同輯

紀事類

志傳

雜記

○ 鸚鵡石の事を記す

伊藤東涯

東涯、名ハ長胤、字ハ原藏、字を以て通稱と云、東涯ハ其号、又慥々齋ともいふ、仁齋の長子、京師に住を、元文五申年歿を、享年六十七

庚戌の歳四月十七日、駒野を發して小萩を過り、脇山

村に至る、行くこと二里許ありて、中村と云ふ地に至

る、山川紛糾あり、そこを世よひふ鸚鵡石と云ふも

此篇文辞平正、よみて音趣明潔、照應あり、波瀾あり、これを味ひ來まば、意味のまろく、長きを覺ぬ

數人を坐せしむべ
さといひてを叶
ぬ格あり

のあり、山の半腹は類然たり、路迂まして窄く、攀躋り
つ、且望み且行く程、三四町まで其石の下に至れ
り、ホを觀るは高さ十餘丈、濶さ二十丈許、西北の方
を草莽根を被へど、喬木ハあり、其右へ相距るはと百
餘歩、まして巖あり、其上に數人を坐せしむべき程の廣さ
あり、ホ、同行の者あり、ま居ても、ホいひ或ハ歌うたひ
又と鼓うちあどす、ホ石の間まや、平らなる處あり、
ホ能を敷き坐して聽くま、ホ聲は應じて或ハ人言を
かゝ或ハ歌うたひ、又ハ鼓をうつ、其輕重舒疾一とい
て、ホふといふ、ホ但慢を隔ていふ、ホのいふが如く、其

其聲左の云々前の
其右へ相距ること
云々、と對しうるべ
し、

昔ハ草木云々、前の
草莽根を被へど、
對して味ふべし、

遂は名ある云々前
のそこは世は云々
云々と應じ

聲左の角まなり、意ふ不塵中物を受くること、鏡の影
をうつまが如くならん、たゞ笛の聲のみは應ぜず、こ
まハ律の協えざるまもある、昔ハ草木生茂りて
此石あるまとを人も知らざり、ホ四五十年前、樵
人の木を伐る聲の響けけるを、始々こまを異し、ホ懼
れて逃走せし、ホ後ま聞初きて、遂は名ある石まぞ
かりといふ、ホ自首尚抄 提解紀談

京丸村の事を記す

柳澤淇園

淇園、名ハ公美、字ハ里恭、通稱權太夫、淇園と号
に、一号ハ玉桂、又玉奎とも書を、柳澤侯の老臣
を、享曆八寅年歿、
を、享年五十三、

東海道濱松といふ宿あり時家のあるトれひひ
と此ところより天龍川は添ひて十五里程山は入ま
ば、遠江と信濃の國の境ある川添の地は京丸と呼ぶ
ところあり其地は他より人の行れらふべきところ
よもあらば國の境は藤の蔓もて長き五六十間もあ
らんと思ふ程の棧をかけたり處の者は京丸の棧と
いへり中陝くして行くよさへ目くらま、竟消ゆるば
りりかまば、彼地へ行くものといひ稀なり某が
親の世ふと京丸へ行れとることありあど只噂ふの
と其處の事語りつぎて見とる人もかたよ此宿の下

男好事の者よて京丸見て來らんと志ば一の暇を乞
ひてかこよ行れたりり其地は家僅ふ四五軒あ
りて農の業はすまども常の食は米を聊も食はで、穉
は小豆を交へて糲とを此男が行れたる家と其中は
も長と思はる、者よて麻の織りとるよ、尾花を入ま
たる、新しき夜の物を出して着せとるのよて、敷け
るものとして、家のちるどもな、枕を木の角あるを
もて臥さしめたり、處の人語りけるよ、此山を登りて
凹々ある處より見まば、珍らしき蒼石りとして案内
けまば、男行れて見るふはるらある岨のもとよ流あ

家のあるトれひひ
の句此男よのよか
らば一家残りまか
しといふ意をしら
せたり

紫内の人云々、下の
夏も暑しといふと
初対して味ふべし
涼しきと馴れども
人の心は暑さよ
さへぬものなり
花びらのわたり云
云上の珍らしけれ
ありといふは應ず

り、水勢の屈曲して激する聲のいさだよきけをひい
ふべくもあらざ、溪間を遠く隔て、其大きき二た抱
もあらんと思ふば、ろりの樹も、色紅よして黄を帯び
たる花、今を盛と咲花たり、夏の事おまじ、餘その暑さ
は、紫内の人々木の葉をひたごれたり、さていふやう
此花の大れさ爰より見まじ、左程よもあらねど、此川
の末尻といふ處に、此花の散りて流る行ゆるを拾ひ
し者あり、花びらのわたり一尺餘もあふべしと思
り、ひらなる木の花より、たえて知る人か、遠江の國
人のおきを京丸の牡丹とて、今猶ちりといふ、此項を

此花の云々上の此
宿の下男好事の
のよてといふは應
四五軒の家云々上
文其地の家僅ま云
云と服しこるべし

夏も寒しといふの
句、尾花云々といひ

人も行たふ事ありて、此地へも至まじ、此花のわたり
溪へ尋ねゆきて見たる人おし、舟後も通らざら
地よて、人の用かた處ありといへり、四五軒の家ある
中よ、長とも見ゆるもの、家へ、寺院めれて佛画を懸
けたり、其画幅を一向宗の、真向光明の彌陀よひと
に大いなるものあり、食物のこを供へ、松をともして
燈明とす、花を手向くることあり、夜を燈火おく、炬を
もて業をおせり、土人の皆總髪よして、男女とも同
じ、髪は鍛よて肥るといへり、子供も皆総髪よて、衣類
よ、麻のちらきを織りて、尾花蒲の穂おど入きたる

又上は麻にて織りたる尾花を入れたる云々といふと他國の字此一境を語氣味ふべし米を少しよても云云上の米ハ聊も食へず

見たまハ俗言なり正しくハ見まほしきといふべきあり

を着たり、夏も寒しといふかの男濱松へ歸るものをみて、泊りたる家あるは、錢もて謝しけども、他國を、るものよて用を足せども、此地は、用をたも、のふりとして取らば家よるへり給ひて後便あらば、米を少しよても贈り給はるべしとて、念頃藤の棧まで人よ送らきてさすりて行けるしとをびく言ひけるよ、大事は行くべしといふ意は、やと宿のある物語りと思ふは深山幽谷はわとりて、ハ、る地も有るまやとおもへば、行きても見をたぬ、ちかんとせらるる

雲萍雜誌

山科の農夫

雨森芳洲

芳洲名ハ東一の名ハ誠清、字ハ伯陽、通稱東五郎、芳洲ハ其号、對馬侯に仕へて文學たり、歿する年八十

此文簡淡にして明正此類の文字これを雅文は求むるも、多く得がところべし、

荷蕢丈人の論語は見ゆ賢よして隠る者あり、

山科のかたはらよ、田業をする親子ありし、道ゆく人の金の以てたる袋をおとしかけるを、其子高れ丘まらたあがり、呼びてらへさんとす、何事ぞと問ふ、志其父めぐと答ふ、おとすか拾ふか、世のふらひか、よ、おた事よ携はりて、わが田をを捨て、そといひけりと、ちか、此人は、荷蕢丈人の類あるべし、

四 頼朝卿静を召して舞はせられし事を記す

近世畸人傳

本居宣長

宣長、姓ハ平、宣長ハ其名、通稱ハ春菴、後中衛ト改
む、号ハ鈴逆屋、伊勢松坂の人、享和元年歿、享
年七
十二

文治二年四月八日、二品並ニ御臺所、鶴岡宮ニ参り給
ふついで、静女を廻廊ニ召出で、舞曲を施さしめ
給ふ去ぬる頃より度々仰らると雖とも、堅く辭ミ申
せり、今日坐ニ臨ミても、猶辭ミ申しけるを、貴命再三
及びけまば仰ニ從ひて、舞曲せり、左衛門尉祐經鼓
をうち、畠山次郎重忠銅拍子たり、静まづ歌を吟出し
て曰く、芳野山峯の白雪ふり分けて入りよ一人の跡

古今集冬
山の白

雪ふりてけて入よ
一人のおとつまも
せぬ
伊勢物語
いふへの賤のを
だまたくりよへ
昔をいまよかすよ
もんか
尤云々、是此時代の
詞づらひありこ
も二品の言を其ま
ま又寫し出す處を
き、其時代の詞遣
ひよて綴きるあり
よく味ふべし

ぞ戀し、次ニ別物曲をうとひて、後又和歌を吟して
曰く、賤や志づ賤のをだまた繰返し昔を今よかすよ
しもがな、二品仰ニ曰く、尤關東の萬歳を祝すべき處
ニ、聞食す所を憚らば、反逆の義經を慕ひ、別の曲を謡
ふ事奇怪なりとて、御景色あしうま、御臺所ハ貞
烈の心ばせを感、給ふよ、よりて、二品も御景色直り
よけり、志をとりて、簾中より卯花重の御衣を出し
て、纏頭せらまけり、玉勝間

⑤ 金吾中納言の事を記す (節畧) 新井白石

白石、姓ハ源、名ハ君美、初名ハ璣、字ハ在中、通稱勘
解由、白石ハ其号、又勿齋、錦屏山人とも号を、幕府

日用文鑑上巻

仕へて從五位下一叙し、筑後守二任す、享保十
巳年卒、享年六十九

秀秋十六歳一して、朝鮮二うとまんと大將軍を承りて、宗
徒の大名あまと引具し、都合其勢十六万三千人五月
廿二日大坂を立て同き七月二日朝鮮二押こり、釜
山城一入る、明くれを慶長三年正月四日蔚山のう
ろまきし、真さきます、秀秋が手よりけて馬武者
十三騎きつておれを、凡を討取る所の首一万三千二
百三十八、太閤一獻つる、此使者同き月廿四日伏見の
城一もせ參る、太閤軍の様を聞召して御感一おめあ

金吾殿の御ふるま
ひ云々之を奪はん
として先之を與ふ
る讒者の口氣罵し
出して妙あり、

ら補おもしろける一石田治部少輔三成ひそ一申
ける一金吾殿の御ふるまひ勇々くも聞えさせ給
ふ、さりおがらすでお御代官としてむらひ給ひ御
身の、ミづうら釜山城を出で給ひ、ふらく敵の中一入
りて戦一を給ひ、こと、事の体輕骨一を存一をれ、か
さき若一その隙をうらみつて、釜山城を攻めとつて
候はん一本朝の通路自由あるべららだ、この、ち
か、御ふるまひおらざるべららざる旨を仰下さ
るべうもや候と申し、まき、太閤實一ふもと思召一す
る御景色よて、秀秋の功を賞一たま一ず、秀秋太閤の

仰らうむりて伏見の城を築く事九ヶ所軍勢をおめおきて、同じ三月十七日金山湊に船を浮め、四月四日大坂につき、明くれを五日伏見の城を参る。秀秋は志とがふ所、伏見はありらふ大名悉く参りつどひ、秀秋の開陣を賀し申さる。太閤やうて御出たりて御對面の事終りて後、太田飛彈守一吉、秀秋の軍に給ひーやう一々

仰かうむりて城を築く事九ヶ所軍勢をおめおきて、同じ三月十七日金山湊に船を浮め、四月四日大坂につき、明くれを五日伏見の城を参る。秀秋は志とがふ所、伏見はありらふ大名悉く参りつどひ、秀秋の開陣を賀し申さる。太閤やうて御出たりて御對面の事終りて後、太田飛彈守一吉、秀秋の軍に給ひーやう一々
は陳べて感下申し、太閤はやく大將軍のミづら諸軍と功を争ひ、ふらくしき軍にん事おらるべからど、我秀秋をさしむけし事かへあぐも後悔はおもひ

人々の聞玉ふ云々上の伏見は在あふ大名云々は對しみるべし、不覺の事云々上の馬武者云々並に城を築く事云々等も對しみるべし、軍奉行の人々上文七人の軍奉行とあるをみるべし、

計の御使ふればこそ仰を承ま、志うるふ今人々のき、給ふところまで御後悔の旨を承るよそ口惜し、れ秀秋の不覺の事おらん、軍奉行の人々、只今御前までまつすぐし申しす、やうは秀秋が首を刎ねられて、御憤を散せられんやうはもたらふべしと押返しく申されしを、太閤御座を御ちあつて内は入らせ給ふ、洛部少輔三成参りて、秀秋の老杉原下野守、山口玄蕃元はむらひ、大殿の御氣色よりらず、先

志やハ怒り時の發
語此時代専ら行ハ
れ一ものかり但一
こハ其有様を形
容していへるふり

そゆ一以下一段仰
ごとの趣を孝藏主
が傳ふる口上あり

すこやう小云々上
の速ら秀秋が首

御館は歸り入ま参らせらるべしといふ秀秋聞きて
志や、くびうちおとさんとする氣色よて、うちか
てつ、徳川殿引いじめ給ひ、どうく制して彼館ま
もかひ給ひし、太閤の御使として尼孝藏主入來り
仰をつとふそ、く去りし頃蔚山の戦まか、あしき
ふるまひし、又さ、今の申條甚奇怪の至あり、まべ
らくをやく筑前の國をうへし、獻りて、越前の地
つるべしとあり、れむ中納言大よ、いつて、や、尼
前、秀秋が身は國うをいれんつ、覺え、命、あらん
ぎり、只もとのま、ふこそ有るべし、ま、すこやう、

云々と對してこる
徳川殿云々上文と
らく制して彼館ま
伴ふとありて、此坐
まあり合せし事
え、ま、仰、謹て云々
上文をうけて秀秋
のためま、く、取
あすま、ま、文
章の妙處

さらば秀秋云々上
文志や首うちおと
さん云々徳川殿引
とめ云々と應ず

さる、徳川殿孝藏主まむ、ひ給ひ、仰謹で承りぬと宣
ふとこそ申さるべけれとあり、れ、尼前承り此上
ハ内府の御もらひまこそ、^{附カ}候べ、れ、政所の御
方へもそのよしを申さるべき、まて、候と申して罷出づ
徳川殿秀秋まむ、ひ給ひ、只、兎まも角まも仰ま、ま
がひ給ひ、ん事こそあらま、し、れ、^{上文政所云々は對す}政所のかげうせ
給はんま、ハ、太閤もさの、ハ、心づよくハおもせし物
を、と仰せられ、ま、さらば秀秋、ま、づ、うら三成が首、ま、つ
て、の、ち、内府の仰ま、こ、ま、る、せ、候、ハ、め、と申さる、徳川

徳川殿も今ハ云々、其ほりい扱ひこう、たりといふさま、おのづから文藝よてまられたり、

殿も今ハ仰せらるべきやうもあく、杉原山口をひそくよめされ、先づ家人少々越前の國よ下さるべしと仰せらまば、外様の侍少々をさし下をかくて徳川殿大納言利家と共に秀秋の事御あげきあらんとありしうども、利家辭し申さ^{まじれば}徳川殿^補日々太閤よ参り給ひ^補殊よ仰出さる、昔もあし、太閤い^補ろまかくも毎日見え給ふやらんと仰せられ、秀秋の國うつされんこといひハハハハ覺えて、此より申さんとて参り候へども、えこそ申出も侍らぬとことへ給ひてその、ちも日々に参り給へば、太閤又もトめのご

さほど云々、上の重ねて日々は参り云々とあるは應ず、

杉原山口めして云々、上文先家人少々云々の結收、

秀秋は物おほく給ひの一句、太閤の意の解きたるをあらハ、上文秀秋の功を賞し給へば以下と對しこるべし、

とく仰せければ、徳川殿のことへ給ふやうもトめのごとくかりし、太閤さ^補んどお^補お^補ひ^補給^補はん^補ま^補の内府のもらひま^補ま^補う^補せ^補参^補ら^補を^補べしと仰せられ、徳川殿よろこませ給ひて、秀秋のもとま^補ひ^補う^補ひ^補給^補ひ、杉原山口めして越前よ下り侍どもめしうへさる、此時秀秋は、越前北庄の地、十六万石をあたふべし、山口は別加賀の國大聖寺の城を給ひて、秀秋のうしろにすべしとぞありし、これは依て秀秋もそのま、筑前を領し、れども、山口ハ此時より太閤の御家人とあり、ほどかく六月二日、徳川殿秀秋と打つれ参らさ給へば、太閤御對面あつて、饗宴の儀事終り、秀秋は物おほく給ひ、安宅貞宗の刀、吉光の脇差、大般若捨子等の茶壺、鷹二連、黄金十

此文一讀の下、おのづから身其地ま在りて、親しく其事を觀るが如き感あり、古人文中多く得難きものといふべし、學者熟讀せば志傳の筆に於て大に裨益あらん

髪は黒きすが云々、一段其容貌を記す

天性喜怒の色云々、一段其性情と平常の動止との事を記す

枚、又徳川殿まも引出物ひける、光忠の刀、黄金三百枚、秀秋この日長崎伊豆守を徳川殿へ使として、此度の御芳恩いづれの時ま忘れ候べし、人報いまるらすべき時こそ侍るべし、まじ申されたり、藩翰譜

先考の行状を記す

新井白石

父まてれもせ一人の云々、我物覺えよりよりは、髪に黒きすがはすくふかりき、面は方におもいまりて、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、さけハ短く、かくおせいかどをべて骨ふとく、たくましく見え給ひたりき、天性喜怒の色あらもれ見えとまもだ、笑ひ給ふまも聲

白石文ちひされとあるべき處ま、常ま小しきと書けり、一家の語といふべし、普通まハ仍やらひされとこそいふべき

高く笑もせ給ひ、事ハ覺え、まいて人を使ひ給ふまも、おろくしきことのとまひ、事ハ聞らば、物のとまふ事いふにも詞すくふくして、立居かろぐりうらば、驚き給ひ、騒だ給ひ、事ま堪へかね給ひ、おどいふ事は見、事あらば、たとへば灸治おどし給ふまも、灸小しきと、敷すくおきとは、無益の事ありと仰せらまて、大きなる灸を、其敷すくおからば、五所も七所も、一時ますゑさせて、いと給ふま、見え給も、身静なる時まは、つねもおもいます所を、淨く掃ひて、壁上ま古画をかけて、花瓶にち春秋の花をすこくさ

してよてもあるや

しをさみて、それは對して黙坐して日を消し給ひ、又
とづら繪かき給ふ事などもありき、それも色を設
けざる事などをば出のみ給も、身の病し給ふ時よ
り外は人をめりてつらひ給ふといふ事なく、お事
も手づららみづららのみかゝ給ひさりき、朝夕の物
をめに事も飯は二椀は過ぎ、手にて椀をさゝぐる
よ、その輕重よよりて、飯の多き少きは忘るれば、其餘
の物を飯の多少よよりて、多くも少くもくらひて、常
にお我腹よみつる分量をすぐをべららず、口よかおふ
物ありとも、一色をのこ多く食ひぬれば、必そのとめ

朝夕の物をめす云
云一段飲食の事を
記す

よ傷らる、事あり、何物をも撰はずして、皆々すこ
づ、食ふ時を互に相制する所あるおや、食のとめよ
傷らる、事はすくおと覺ゆるおりと仰られき、よ
のつねにもこおとより参る物をもめて、何物を
まゐらせよとのさまひし事はあらば、たゞ四時の新
味をば、その出来より初よ、お物よ限らず参らせよ
と仰せらきて、家人と共にきこゝめしけり、酒はまづ
らも喉よ下し給へた、大きよ酔ひ給ひらば、たゞ盃
を把りて歡を交へ給ふのこおりき、茶をばこのみて
めしけり、身よめしける物も家におもむる時、洗ひ

けりもの
一段其衣服の

〔E月之金〕

事を記す

扇かどをも云々、
段身は帯るもの、
事を記す

す、だーものをもめーけれど、あうづきぬるをばい
ね給ふ時めす事なく、門を出給ふに至りては、必新
らーく、あざやうある物どもをめす、それも身よかひ
給もぬ品のものを用ひられー事はあらず、むらー人
らつねよ身死ーおん後の、見苦ーからぬやうを心
かけーかりおどの給ひとりき、扇かどをも人
よ、とでも落し、忘まもする事あり、これらの物にても
そのぬーの心はおーそうらる、事かりと仰せられ
るむらー様とくいひて尺バウりの白骨あるよ、紙は
金銀の砂子地あるを用ひ給ひ、繪かきーもあうるべ

き畫士のうきーよあらねば用ひ給もば、まーて刀わ
きざーのおとき、武器の事はいふよ及をず、七十よ餘
り給ひー後よ、左の臂痛し給ふ事おそーまーて、其由
を申ー給ひ、職を辭ー給ひーかど、戸部ゆるー給もざ
りけり、それよまーては巾一寸六七分むらりありて、
長さ一尺餘ある、鞘卷の刀をウリを帯ーて出仕ー給
ひ、刀をば道の程をうり召供のものよもとせ給ひと
りき、今おもふよ異躰の事ありーうど人もどがめば、
まーて戸部ものよまふ音もあうりき、思ふよこれと
もー事あらむよ刀を帯ーながら、それを用ひざらむ

事志うるべうらば志うりとして身は痛あれを刀を用
ふるよも堪へど志うらば無用の物身は随へざらむよ
と、と思ひ給ひしおや、其鞞卷は身終て給ふまで常よ
身をまおし給えて終り給ふ時は仰せ置ましうらば、陸
奥はおもする幼きより養ひ給ひしとて一人の許は贈
りぬ、飾まる所は黒金物よ浪を彫り行カるは鞞の黒
くぬりしよ千段巻といふごとくお巻まし所を、金白
檀といふものよさしかり、髪おろし給ひし後ハ鞞を
バ皮のひたもどにいまされたり、下略 折焚柴

⑦富士谷成章略傳

山崎北峯

北峯名ハ美成、字ハ久卿、北峯ト号シ、又好問堂ト
稱す、通稱久作

三歳書をよくし、
漢文口調の書さま
ふり、これらハ三歳
よして書をよくし、
とこそよくべけれ、
但し三歳おしてと
あるらら、次の七
歳2010といふべ
きを、或ハ省きて、
七歳詩を賦せりと
いふこともあれど、
初めを省きて後と
全くいふことハお
しとあるべし、
聖人の書といへど
も云々、數句、名家略

富士谷成章字ハ仲達むとめ層城と號し、後その居宅
の地名よよりて北邊と號を、皆川淇園が弟あり、三歳
書をよくし七歳よして詩を賦せり、九歳の夏韓使の
來聘ありし時韓人と筆談せし、幼よして其才氣の
いちもやく、應答の速あるは韓人も舌を巻きて嘆賞
せりとぞ、長ざるふ及びて群書を涉獵し、自ら思へら
く、近を捨て、遠を求め、目を賤しめ、耳を貴ぶこと、世
の人の常かり聖人の書と雖も異國の教の、吾邦の
典故を學ぶよ志うらばとて、國史律令ハいふも更あり、

傳の文辭一つとし、蓋し校正の疎漏は依るゝ、今白首尚抄引く所は從ふ、

家乘遺集まで、普く搜り、廣く索めて究めずといふこと
とあり、ある時皆川淇園清君錦と同トく、成章が家
集會して、百題を出し、午時より子時をもて限とし、お
のおの五律を賦するよ、淇園をやく就り、君錦次ぎて
就る、成章ひとり後まければ、人々平日の穎悟敏捷お
るよ似ざるをわやりにけるよ、その出すお及びて、百
題よおのく和歌一首をよみそへたりこ、お於て坐
を擧げて大よ服せりといへり、享年四十二歳、淇園よ
先ごちて没せ、名家略傳 白首尚抄

⑧ 塙保己一傳

中山信名

此篇長文かまじ、首尾の連絡あるを、他の例の如く節略して載すべきはあらず、よして今ハ語脈を關する處々を撮擧して掲載すること、ハおしぬ、又此書總てハ原文を略せる處を、或ハ中略おど記入する例おれど、此篇略する處頗る多く、今そを一々記入せんも煩ハし、趣意の續く處ハ之を略し、趣意の轉る處よの云々と記す

温故堂塙大人名を保己一、氏ハ荻野といふ、塙ハ其師須賀一檢校の本姓を冒されしあり、其先參議小野朝臣篁卿より出て、世々武藏國兒玉郡保木野村に家居す、世を經て宇右衛門に至る、宇右衛門宇兵衛を生む、是大人の所生あり、此人加美郡藤木戸村の父老齋藤

理左衛門といふ者の女を妻として延享三年丙寅大人
 をうめり、幼名を寅之助といふ、五歳の年より肝を病
 りて、七歳の春俄に盲目とある、十二といふ年宝曆七年丁丑
 母を失ひて憂うまひあつ憾あつふ事尋常ならず、是より漸く東都に
 出で、業をおすべし心起さまじく、或人の語るを聞
 くくまま—お當時某とらやいふ者太平記一部を諳誦し、
 東都に在りて諸家より出入り、名を著はばとき、て、大
 人心を思はく、太平記の全部四十巻に過ぎず、之を知
 るをもて名を顯はし、妻子を養ふ事行を得らるるべ
 し事事々々とと此此に至りて東都に出入りする志いと切あ

り、十五といふ年の春宝曆十年三月父を請ひて東都に至り
 雨富掄校須賀一が門人となり、彼家より寄留し名を千
 彌彌と改む須賀一掄校本氏に塙といふ、雨富といふは
盲人一座の習座名といふものにて別稱
 り云々翌年萩原宗固が門弟となり、物語様の文とも
 をよみて歌よむ業を學はる、其頃川嶋貴林といふ人
 あり、大人とまよつきて小學迹思録おどより初めて
 異朝の書籍を習ふ、折ふしおを神道の教をも受けた
 り、云々山岡妙阿妙阿を其頃博學あるをもて名を顯はせ、大
 人又此人をよりにて律令をよままき、難經素問おどい
 ふ醫書をば、品川東禪寺の僧孝首坐し習ふ、十八とい

ふ年宝曆十三一〇座の衆分とあり名を保木野と

ふもとより記憶をぐまうバ漸く其名を知る者

あるま至るはドめ大人兩富が室に入り時其教は

任せ三絃を習ひけるは今日習ひ得しものハ一夜の

程は怠まて明日ハ知らをふりけり都て三年の間は

一曲をも全くハ覺え得ざるのみう調子さへ合ざり

ければ兩富せんもべおくて針治の術を肯とあらハ

せけるは醫書よむ方ハ人ハ勝きて二度よますれば

其次の度ハ一文字も違へどよむ程ありけれど術

よりまきハ人よりも遠は劣れりこの文よむ方ハひ

うるれをおるべし兩富餘りハ覺えてせめ言ひける

ハ云々こまよして三年を経て成す事あくを速は郷

里は送りやるべしといふ大人肝は志るして晝夜と

おく讀書をつとめしうむ終はハ名をあらハを迄は

なりまたり二十四といふ年の春明和六年三月歌の師宗固

の言は從ひ編者云此處殊縣居はつきて習ふこハ

て六國史をもとげよまれけりさきど此冬縣居死は

たりければ僅ら半年許おん教をむうけられし

て大人の學業日を追ひて進みけるまハ兩富もい

とくめで一日大人を招きてさとすやう當世一座

塙句當と稱一の句
上文塙ハ其師須賀
一云々及ハ割註須
賀一檢校本氏ハ云
云と對一味ふべし

の様をこるゝ序を進む^補者皆金を旨として、術藝を
拘へらず、うくてありおを後よハ一座の内お藝學ぶ
もの絶失せおん、汝が學業をやう人よ超えたり、然れ
ども財も持ち得ざれば序を進む^補事得可らば、吾
之を思ふが故よ汝が爲よ金百兩を貯へかけり、宜こ
れをもて序を進む^補料とをべし^補として出^補たび^補た^補れ
を、遂よ安永四年といふ年の元日、階^補を、みて一座
の句當とあり、塙句當と稱^補一名を保己^補一と改^補む^補云々
此年雨富の家を離れて、番町尻谷の北坂上ある高井
山城守が宅地よ移住む、大人情々思はく異朝よハ漢

魏叢書おどより初めてさる叢書ども、聞えたり、皇
國よハいまだ其例おし、さらばお、よもら^補こよ倣
ひて彼處此處よちりおひある、一卷二卷の書を取集
めて、形木よ彫りおきおハ、國學をる人のよきたをけ
おるべしと思ひとりて、同八年己亥の元日より天満
宮よ誓ひ、心經百万卷願だてし、日毎よ寅の時より起
出て、百卷宛の着經怠らず、此年又宅移して土手四番
町ある東條信濃守が宅地よすむ、是より先よも來り
學ぶ者おきおハあらねど、お、よ至りて門人とおる
もの數多あり、云々、さて彼集めてんと思ふ書をも群

書類従といふ名を設け、こゝに求め彼處より得し程は、珍書ども、多く出でたけまけま、やうて上木の功をおこし、年ふ従ひて若干の巻數出でまけま、天明三年といふ年の三月おもひの外は、檢校の職は選りぬ、寛政五年の春編者云こゝも殊は節略せり云々、和學講談所建つべき地所給はるべき由、といふ仰事ありて、其七月は裏六番町ある宅地三百坪をうけ給はる、同十一月講談所ありまけま、やうて會始あり、翌寛政六年盲人一坐の取締といふ仰を蒙り、同七年の九月は講談所永く絶ゆまどき料として、町屋敷を給はり、年毎は

其納むる金五十兩をもて雜費にあてらる、同十二月白銀十枚を給ふ、是よりきね群書類従のうちは、版成りたるもの若干巻を奉るが故あり、同十年五月開版の形木納おんべき庫をつべた敷地ふとして、品川村の内御殿山の下ある地千六十坪をうけ給はる、同十一年五月一坐の取締の職辭し申をよより、白銀貳拾枚を給はせて、其勞苦を賞し給ふ、同十二月此程學問所にて撰むせらるゝ所の孝義録を校正し、假名の使ひざま、詞の延べ様など、あらたむべき仰事ありて、徧く校正して功ありたまけま、やうて開版ある、又ことある

仰事よりて、此年より門人を京師に登らしめ、諸家
よひめもてる名記を寫さしめ、書改めて紅葉山の御文
庫に納む、年を逐ひて數百部におよぶ、其草稿をば家
よ納むる事を許さる、當時かくばり家々の日記を
納めもてる人絶てあることあり、又日本後紀を世の
中ふ久しく絶えて傳はらざりしを、さたは京都の名
家より求め出さきて、形木よあらむ、総て十卷あり、
全部の五分が一ありといへども、猶六國史の員備は
る事、今の御代とありて、此時初めてあり、令義解百
鍊抄など悉く校正して、猶追て上木の功を企てらる、

表六番町まで云々
上文裏六番町ある
云々と對し味ふべ

世の國學をいふ者、容易く奇書を見る事を得^るは多
くら大人のいさをかり、享和三年一坐の總録とあり
て、本所ある總録宅地よ移り住む、文化二年正月裏六
番町ある敷地を召上らき、其代として、表六番町よ
敷地八百四拾坪を給はり、講談所を此よ移したつ、是
迄の地所狭きを以てあり、天滿宮を宅地中よ營み、年
頃の宿願を賽す、此年一坐の總録の職を辭して、十老
の列とあり、表六番町よ歸り住む、一坐の先例、十老よ
入る者よ必京師よ移り住む、然るは大人をことある
勤あるを以て、公よ江戸お留め給ふ、同五年六月、宇

多帝仁和三年より以來、正親町帝慶長八年迄の間、實録
修めらるべき料編みて奉るべき由仰事ありて、之を
史料といふ、御家より侍らふ人の中より、門人のさるべ
き者數多をさへ添へ給ふ、又其序を以て、武家より係ま
る者の職名、文書、兵器など、あべてあるべし名目をも、
類聚し奉るべき由ゆか命せらる、こまよよりて、別よ
御手當として、年毎よ金五拾兩を給ふ、同八年蝨蠅抄
六卷を撰びて奉り、くべ、白銀五枚を給はりて賞せ
らまじ、同十二年四月和學の事よつきて、常よ公の仰
事を承り功あるを賞し給ひて、大城よ詣で、はじめて

而御所を拜し奉る、是より年毎の始よ、御醫者よち
と共よ年の始の御悦を申して拜謁し奉る、云々、文政
二年群書類從六百七十卷形木の功あり、年來の願望
はとげぬ、國開けてより後よ、大部の書上木せしこ
と、こまよ超ゆるものあり、是より先、續集の企ありて、
年を逐ひて奇書多く集まり、総て一千八百部よ至る、
前編千貳百七十部餘、合せて三千餘部あり、續記で上
木の功をおこさきんと、た大人物語てふもの、何あら
ず暗ららぬ、殊よ源氏榮花などを旨とせらまじ
あり、源氏など講せらるまじをり、讀者よこたがへとり

物語てふもの云々、
上文物語様の文と
もよよとてとある
は應ず、

折々讀繼だおどせらるゝ一文字もたがはだ榮
花を標注せらまされど、いまど版おらのほせらまだ
此年大人年七十四、其盛あること常の人の五十餘程
の如し、猶おのされもいらばらりの榮々おもすらん
といとたのもー(下略) 好古雜誌

⑨竹中家譜

新井白石

丹後守重門も、半兵衛尉重治が男あり、重治が父遠江
守某が時に至りて、當國の守護齋藤山城守入道道三
と隨ひて、不破郡岩手の城ふ在り、重治といけおく
て父は付き、菩提の城はあり、生年十九歳の時主の右

此篇本文を一は太
關記は譲りて平正
簡淡は記、兩段の
法各成説を引載し
て、重治が人とあり
を述べ、併せて其人
を評す、委曲の筆意
味ふべし、

兵衛太夫龍興を恨むること有りて、おのが主從僅は
十五人、永祿七年三月八日の夜、稻葉山の城を襲ひ取
り、龍興辛死命のがきて落行きぬ、織田殿此由聞給ひ、
其城參らせたらんは、美濃國半を分ち賜はるべし
と仰下さる、我國は中よあらん城、他國の人よ參らせ
て、所領賜はらん、事望お所よあらば、とて參らせだ、一
年を経て後、城をば龍興よぞ返し、あたへける、
葉山の城襲取りし事、太閤記は委しくこえたり、去
らん云々と表裏相
應ず、重治が稻葉山
の城を襲ひしは、毫
も利欲の爲まする
が被官をまば、質し
龍興も此人の愚はこ
えしをわかづりて、
常は無禮の

城をば龍興よ云々、
上の我國の中よわ
らん云々と表裏相
應ず、重治が稻葉山
の城を襲ひしは、毫
も利欲の爲まする
が被官をまば、質し
龍興も此人の愚はこ
えしをわかづりて、
常は無禮の

出たる事を明し、
史筆の妙處着目す
べし

事も多うりけり、十九歳の時城に登りてありし、龍
興が侍共、主の常々あおづるに習ひて、櫓の上より重
治にお便をえうけてけり、重治さらぬ躰もておし、
押拭ひておのが城に歸り、舅の安藤伊賀守が許し行
きて、重治の屋形を恨み参らざる事ありて、巖ひ参ら
せんと思ふおなり、加勢給はるべし、と云ふ、安藤もあ
ま愚おる人哉、我等が小勢を以て、屋形を傾けん事叶
ふまどと思ひし、うを、この事務を然るべうらざ、と教
訓して歸も、重治第久治煩ふ事あり、側らよ侍らひて
醫療を加へよ、とて侍六七人を城中に入置きぬ、其日
暮方は長持は物具入れて、雜人お昇らせ、とづら侍
十人計具して城中に登る、是は舍第が病とぶらふ人
人よもておさん料の酒飯やうの物よて候といひ、
程は門毎は答むる者もおくて入りてけり、詰の城は
入りまをまして、物具ひりくとかためて、切く入る、其夜
の侍大將齋藤飛藤守をば、重治真ニツよ切て伏せ、斯
る小勢たるべし、とへ思ひもよらず、俄の事よあり、
城中の在合ふ輩、周章する所を、十七人の者ども、こ
ろしこよ切て廻り討たる、者少うらず、龍興からき
命たすうりて、落行きぬ、城中は早鐘鳴出で、以の外は

騷動しける程は、安藤伊賀守、婿へ彼男攻入てけり、と
て、大は驚き手勢引具し、鞭鐙を合せて馳來たるは、城
をば既よ重治が手よ取てけり、其後安藤が計らひよ
て、龍興重治中おなりして、城をば龍興よ返しあこへ、
重治え近江の國よ、重治其後織田殿よ随ふ、元龜三年
在りてけりと云ふ、織田淺井不快の事起りて、木下藤吉郎秀吉を、差向け
らる、よ及ひて、重治よ寄騎の侍多く附けて、秀吉よ
副へられたり、是より常よ秀吉を助けて、謀を廻らし、
戦を決す、始め豊臣太閤、多くの武功をあらはし、織田
殿の御感よ預らり給ひし事、偏よ重治が助け参らせ
し、依ておなり、天正七年の春、秀吉を助けて播磨國三
木の城を攻む、心地例からぬ、醫療加へんとて、都よ登

偏よ重治が云々、注
の思ふよ秀吉云々
と照して味ふべし

さらば軍中まこそ
死かめの一句重治
奉公の志の篤きを
見るべし

評論を注し書ける
ハ藩譜なるを以て
ありも一傳からば
評論をバ傳後ま述
ふべきあり

る、我病いゆる事ありがたしと聞死て、さらば軍中ま
こそ死かめとして播磨國ま馳下り、同六月平山の陣ま
いで空敷ありぬ、三十六歳とぞ聞えける此人の事、太閤記ま其傳
あり、合せて見るべし、古き人の申し、重治が勇謀
武略、人恐れ敬はずと云ふ事なく、昔の楠、今の竹中と
申し、あり、此人三木の陣ま在りし日、書寫山まて僧
の具數求め、高野山まのぼせおき、城費落しとらん
後へ、必世をのぞきんと思ひ、いふ事と云ふ、思ふ
ま秀吉我勢のおこるお隨ひ、我才を重治ま及ばぬ事
を知り給ひ、彼を深く忌思ひ給ひ、いふ依て、斯ハ思立
ち、かゝるべし、古の陶朱子房がたぐひまや本朝まも
かゝる類を見、其志のおらずして、身死く死せし事
惜しむべく、又幸ありとも言はま、誠ま尊ぶべき人
けり、丹後守重門童名源助七歳まして、父重治まおく
る、秀吉天下の事を志るしめさきて後、十六歳まて従

五位下丹後守まおさる、菩提六千石を領せりと云ふ、慶長五年の秋
關が原の戦、東國の味方として、小西攝津守行長を
生捕て参らす、重門が領せし相州の地下人、生捕て、其領主おまき、重門が許ま召連き來まきり
り、大坂の軍ま、酒井雅樂頭忠世が手ま属して戦
ふ、重門五十九歳、寛永八年十月九日ま卒す(下略)

⑩ 壬子試筆の詞

室 鳩巢

鳩巢、名々直清、字ハ師禮、一の字ハ汝正、通稱新助、
鳩巢、駿臺、滄浪等の号あり、幕府ま仕へて、儒員た
り、享保十九寅年歿す、享年七十七、此文典故の
引用等頗る多く、且其文體もや、高尚ま過ぎと
る處あまきども、學者ま在りて、此類の文例をも
知、おかくらた要用おらんとて、採收まること、
ハかぬ

白駒の隙

漢書劉澤謂張良曰人生世間如白駒過隙耳

黃金の術
史記封禪書丹砂可化爲黃金黃金成以爲飲食器則益壽犬馬の齡とハ自の年齡をいふ字下の辭犬馬の齡是まであるべしとし思ハ七十あまりと續けて心得べし昔の董生を云々漢書董仲舒傳は下帷講誦益三年不窺園

日月送お移りて白駒の隙過ぎやをく衰病日は侵して黄金の術成てざとさきバ犬馬の齡是まであるべしとも思もざりていつら^補も老の波よて來てきころより身は痿疾を得て手足もろからん起居もかやめるまは昔の董生を學ぶとも知らねども此三とせ春の園を窺ふこともかおもねば閨の中おづら梢よつたふ鶯の音は殘りの夢をさまし枕よるを^補梅の香は過ぎ昔を去のふばらふおんありけ^補る^補るもあれど幸は若かりし時より學びの意は年

邯鄲の歩

胡曾文は將趕漢汗之程詭學邯鄲之步さても多くは年月の向上の犬馬の齡云々應す富貴ハ浮べる雲論語は不義而富且貴於我如浮雲楊福ハ糾へる繹賈誼賦は夫禍之興福兮何異糾繹

を經る甲斐ありて程朱の道は志をダひて鄒魯の風をたづね韓歐ガ文をおのゝて邯鄲の歩を學ぶまぞ老の寐覺も慰ぬべ^補き^補ても多くの年月を經て世のうつとらる有様を考ふるふ盛衰榮枯互は行き^補る^補ふをバ夢とやいもん現とやいはん誠は富貴ハ浮べる雲の如く禍福を糾へる繹のごとといへるま何うたがふ事あるべ^補た^補中は唯吾ガ聖人の建て給へる三綱五常の道の天地と並び傳へ古今の隔てか^補く^補是をかりか^補か^補も^補る^補事あるべ^補ら^補ん^補人として仰ぎ崇ぶべきは此道ぞ^補ら^補然^補ま^補ども^補儒教世は行ハ^補ま^補ざ

虬蟠撼樹

韓愈詩云虬蟠撼大

樹可笑不自量

精衛填海

山海經云發鳩之山

有鳥名精衛是炎帝

之女往遊於東海溺

而不返常取西山之

木石以填東海

己より人々義理を疎く、利欲をさとくある程、五
常の道すたきて、風俗日よ下りゆくこそあげらば
けきもとよりいやし、己身よて一代の風教を維持せ
んとすとも、わづか及ぶべしおらねば、ひとへは
蟬の樹を撼らし、精衛が海を填むるに似たるべし、さ
らへど世を憂ひ、民を新よするも、吾儒分内の事お
まは、是を度外におくべしおらねば、いりおまは世
は老師宿儒と稱する人の好みて異説を肆よし、又々
他道を雜へて仁義五常の沙汰をばよそよするこそ
うけられぬ、たゞ務めて新奇を競ひて、俗耳を悦ばし

己一人ハ云々前段
をうけて然るども
儒教云々の意を結
ぶ

己が身ひとつハ
月やあらぬ春や昔
の春からぬ己が身
ひとつちもとの身
まじりて此歌の詞と
るりて、遠く前の志
のハあまど幸よ云
云の意を收結を

め、時好は投ずるあるべし、いと口惜き事あり、古人の
以てゆる阿世曲學とは、是等をいふあるべし、よ一人
とさもあらば、あれ、縦ひ、風俗を昔おあらぬ、
も、己が身ひとつちもとの如く、仁義の道を守りつ、
前修の模範を失はすと、思ふこそ、責て、儒とお己し、志
る、下略 駿臺雜話

⊕ 杜鵑を聞きて感あり

瀧澤馬琴

馬琴名ハ解字ハ瓊吉、曲亭馬琴と、戯名ハ著作堂、
信天翁、菟笠翁等の号あり、嘉永元申年十一月歿、
享年八十二

庚子四月十五日の朝、杜鵑の初めて鳴くを聞く、立夏

琴嶺は馬琴の長子
まて其病歿せしハ
天保六年五月七日
の事かまへ、病中杜
鵬とありまかき一
かるべし、

後十日あり、去年ハ立夏の日より鳴きぬ、今茲々去年
より十日後まきとると、季候の遅速あまハあり吾この
鳥の聲をきく毎ハ故兒琴嶺の事を思ひ出で、悒々
と、物よりて懐舊の情ある事人皆志らて景よ
りて情起り情をもて景を思ふ、脆き人の心あるら
な、 著作堂雜記抄

東照宮參拜の記

大田南畝

南畝名ハ單字ハ子規、通稱直次郎、後七左衛門と
改む、南畝、蜀山、杏花園、遠櫻山人、石楠齋等皆其号
あり、幕府の臣、文政六未
年四月歿す、享年七十五

四月十七日半日の閑あまバ、妻戀稻荷社ハ神君の御

同ト御紋、うき提
燈をとて一のミユ
て云々、失望のさま
味ふべし

影ありとき、てうらひひ、門邊に提燈あどたて
て神樂あり、稻荷の神前ハ、葵の御紋深めとる白き帳
をとたれ、同ト御紋かき提燈をとて一のミユて、外ハ
問ふべき人もあけまが立出づ、人の多く参りつどふ
を憚りての事かるべし、それより深川の方へゆく、今
の三十三間堂いまだ再建あらざて、時、かたへの小
祀堂の内よおん、まを、甲冑馬上の御木像ハ、八幡宮
ありといひ、近江頃尊像の御胸ハ、葵の御紋ある
を見出で、是まと神君の御像ありとて、私うお人々ま
うで、事あり、いらんと思ひて、其堂お詣づる

されど今日思立ち
一云々、一句全篇を
收結し、且南薫風
の句を下して、か
のづから其愉快の
情を寓す、味ふべし
起筆は四月十七日
といひ半日の開あ
ればといひて、借湯
島より深川に至り
一事を叙し、秉燭の
頃やどりま歸り
といふ、長日のさま
言外に見ゆ、且南薫
風の一の句、四月
薄暑のさまも著し
老練の手段といふ

よ戸さして人あり三十三間堂に立入りて見めぐり
よ、今の堂の本尊ある觀世音の像のうしろの方を
る内陣は、白き戸張をからばか、げしをひそらう
らひ見るふ、正しく昔の甲冑馬上の尊像にて、御馬
のふちと、御胸のあたりまでほのそえ、御ぐ
ハ、戸張のうちふかくきて見え、あらもふ拜奉ら
んも空おそろく、速に立出てぬ、さきど今日思ひ
さちし本意とげし心地して、南薫風、大川をさ
りて、秉燭の頃やどりまらへり、一語一言

西北紀行

貝原益軒

紀行道の記の類へ
文體殊に平易ま
て明詳ならんを要
す此篇の如き最も
模範とすべきか
り、
六十を下壽といふ

益軒名を篤信、字ハ子誠、通稱久兵衛、益軒と号し、
又損軒とも稱す、筑前福岡の藩士、正徳四年歿
す、享年
八十五

元禄二年我が年をで下壽及べて、かねてより丹
後若狭近江は遊觀の志あり、閏正月廿五日餘寒猶も
げしけきど、つとめて京都東洞院の旅館を出で、勘解
由小路を西へ、二條御城の郭内より、大學寮の舊跡、
酒井讃岐守を過ぎ、朱雀を南へ、四條を西へ、壬生の地
藏堂、或ハ壬生寺とも云ふの邊を過ぐ、此寺に壬生
忠峯が硯あり、此は忠峯が宅の跡あり、壬生の西の田
の中に雀森あり、○西院村、秀吉公の築き給ひしを經、

此北は山内村あり、○紙屋川西院より五町許を渡り、丹波へ行くは此路迂遠なきども、嵯峨と堅木原の間を見んとめ、梅津の東を通る○梅津村京より二里ありの東に王墓とて大なる墳あり、是古の天子親王の御陵あらん、其御名をある人あり、陵大おれば中世以後の陵まはあらざり○桂川舟にて渡る、此河水いとやさ、故より都より爰來て布帛を洗ひさらにものおやし、宋景濂が日東の曲は渭水西流曲似鉤といへるを此川あるべし、是より松尾の社右よりゆ○西芳寺松尾の南此寺ハ厩戸太子の開基、夢窓國師中興せりとあり

ん、両山の谷あひま在りて佳景あり、堂前假山水ありてひろし、夢窓手づら經營せる所あり、今世假山水を愛する人は是を以て摸範とす、又嵯峨の天龍寺の方丈の後庭の假山、臨川寺の假山も、ともに夢窓製せりと云ふ○山田村上下兩村ありの南は車塚と云ふ塚あり、これ文徳帝の御車を埋めし塚あり、凡御陵のうとへらに車塚他所もあり○御陵村は文徳帝の御陵あり、小山の如し、是田邑の御陵あり、御陵の上は小樹あり、此南は川あり、常は水おくして霖雨のとき水出る川あり、土人たんど川といふ、是田村を誤りてとんだと

云ふあるべし、山田村といふも即ち是田村あるべし
 ○堅木原御陵村より十是丹波へ行く大道の宿驛あり、茶屋あり○塚原村○沓掛村、是より五町許西路の左に大石あり、里人は是を酒顛童子が腰かけ石と云ふ○おいの坂、是山城丹波の境あり、本名は大江山あり、大江の坂を誤りておいの坂と云ふあるべし、大江山生野の道の遠けきばと、小式部がよこし、此處の事あり、生野も天の橋立はゆく道もあり、又丹後にも大江山あり、むらゝ酒顛童子が住むとる所ありと云ふ、それハ天の橋立は行く道おあらざれむ、小式部が歌

によめる大江山はあらず、大江の坂の嶺より少し西に地藏堂あり、其側は龜山城主の休所あり、地藏堂の少し北に山城丹波の境あり、嶺より京都及び山城諸山よく見えて佳景あり、地藏堂の西南に一村の松林あり、是酒顛童子が首塚ありと俗にいへり○王子村おいの坂より十五町をうりあり○篠村此邊栗田郡あり八幡宮あり、足利尊氏都没落のとき、此社に詣り、願書をこめ、供もあり、軍士共矢を納めし所を矢塚と稱し、社の西にある小塚あり、愛宕山を東に見、保津村を北に遠くやる、保津は差我

川の上の北にあり、保津山名所あり丹波のおくより
 材木薪等を取りて、船筏にて保津より出、保津より筏
 を組直し、材木薪をおろしつつ、山間の狭き川をくだ
 りて嵯峨より出づ、其間瀧のごとくある急流多く、又岩
 間のまがきる所多くしてあやふし、おろれども筏士
 どもよく乗りおらひとれども、のりあやまる事ありと
 いへり、保津より嵯峨へ二里あり○龜山久世出雲守
 殿五万石の居城あり、町長し、旅人の宿驛あり、茶店あり
 民家いやし、龜山より北東の山の根より出雲と云ふ里
 あり、龜山より一里あり此所より出雲の大社を勧請をと云ふ、此

所の事宇治拾遺徒然草おどにもみえたり○宇津禰
 村○並河村○大井村、此邊仙洞御領あり正一位大明神の社あ
 り、延喜式神名帳より乘田郡大井神社と有り○小林村
 ○小川村○高卒塔婆○川關○八木村、此西北の山より
 内藤法雲が城址あり、鳥羽國部領也馬驛あり、今夜ハ鳥羽
 より宿老、京より是まで八里あり、凡此國ハ京にちうく
 して、大江の坂の山一つへど、りぬきど、民俗人家ま
 べて畿内より大ふつかりていぶせくいやし、
 廿六日雨ふる、卯の時より鳥羽を出づ、鳥羽より關へ二
 里半、大谷へ五里、凡丹波より嵯峨へ出る材木、おろく

ハ大谷より谷川よつけて出、下して嵯峨に至る保

津より川上ハ瀬ひろし、保津より川下ハ山間を流ま

ゆく故、クへりてせバ、云々○室川原○小山○園部

ハ鳥羽より小出伊勢守殿在所あり、宅あり、町長く民

屋よからば、京より九里、是より西ハ篠山道あり、但馬

へゆく道あり○三戸野嶺園部より一里上下一里あり、坂ハ

峻く、うらば、坂の上ハ民家あり、其所を嶺と云ふ、俗ハ

云ふ山椒太夫ヶ關をす表一所あり、此邊船井郡あり○須知

村園部より二里あり○曾根村○印内村、此西ハ紅新田と

て民家少一あり、其邊に廣野あり、紅野或云蒲生野と云ふ、

方一里ありと云ふ、紅村ハ名所あり○山内村あり、是

土佐大守山内氏の先祖の住めり一所ありと云ふ、此

邊藥種おやし、澤瀉を田よりとす○中尾村○

檜木山村○尾細○水原○大久保村爰ハ遠見岩、強盜

岩おど云ふ大石あり、中世此邊盜賊多かり一故此名

ありと云ふ、此邊朝倉山椒多し、又子の小あるをハ里

民びんせうと云ふ、びんせうハ何國とも有りよのつ

ねの山椒あり、朝倉の木ハ刺少く、びんせうの木ハ

ハ刺多し、是より○やうその嶺大なる坂を越え○茨

木村を過り○千束お至る日既ハ薄暮おまば爰ハ宿

乙ぬ、鳥羽より千束迄八里(下略) 諸州めぐり

天保六乙未年日記

瀧澤馬琴

五月朔日 己未曇 晝時晴 夕方又曇

此日記中よきえたる、何々候何々畢遣之、おど様の文字ハ中世繚紳家の家記より轉ト來きる一種の文跡おまきハ今日の日記文ハ或る取捨する所あるべきあり、日記も亦紀行類ト同トく其文跡ハ極めて平易にして、記事最も詳細なるべし、此篇記する所の如き、真に其要を得るものト云ふべし

四時過土岐村老尼來る、先日より芝宗之介方へ罷越久しく逗留今日ろへり候よりあり、雜談數刻歸去、兩三日前より初鰹出づ、今日片身をうひ得たり、一尾の價金壹朱餘あり、片身價貳百二十四銅を費しぬ、八時頃よりお百太郎同道よて、半込横寺町圓福寺へ參詣往返共飯田町清右衛門方へ立寄、兩人共暮六時前歸宅

晝前より宗伯頭痛惡寒、且例の痰痛よて乳の邊痛候よしよて打卧、夕方より苦惱、夜中不睡のよしあり、予ハ犬傳九輯十一の卷、百十二回十五丁迄つけがな夕七半時頃迄は稿し畢、誤脱校閱の爲、宗伯よまごし置候へども、宗伯病苦よて果さず、依之夜よ入予再讀、誤寫心付候分補之、四時一同就枕

二日 庚申薄曇 四時頃 薄晴

今夕庚申祭如例、神酒七色ぐこし神影よ獻供、四時過神燈奉祭之

晝前丁子やより使を以て、ハ犬傳九輯九の卷さし晝

の貳右壹丁畫寫本出來見せらる、並し畫扇二箱廿五
本如例賛頼之持參、扇子ハ請取さし畫々筆工金兵衛
方へ持參り、れ入致させ、又見せ候様申付遣し候處、其
後右使來らず、さるハ金兵衛當番まで今日の間に合
はば候て、さし置らへりさるかるべし、

今日宗伯尤不快といへども、八犬傳九輯十一の卷百
十二回稿本校閲し畢、誤脱あるしつけおこちを以て
差越候間、予則補綴之、其外ニヶ所補文し畢、

八半時頃筆工道友來る予對面、右八犬傳九輯十一の
卷の口稿本、並減字□りみ十五枚添えし遣し畢、

夕七時前土岐村元祐改高橋玄徳、妻子不殘引連來訪、
手みやげ被贈之、宗伯ハ病臥、予ハことの外長髪し付
不及對面、おこち出迎於客坐敷茶をす、む、病人ふて
取込し付早々歸去、

夕七半時大郷金藏來訪、予對面手みやげ贈らる、今日
ハ主用よて此方へ罷出候序のよし、過日山田和太郎
幸便し返却いし候、北條分限帳以外寫本四冊、落手
のよし被申之、雜談後歸去、

予今日多用あり、依之八犬傳九輯十一の卷百十三回
十六丁めより貳丁、今夕四時迄は稿之、尤書おろし

をかり

夕方土岐村老尼來る、宗伯大病に付意見被申之、並に外より被頼候よし、いろいろの點予は頼度よしにて持參、然まどもいろいろの點、前々より不致候に付、おこち取計返し遣し候由、おこち後お告之、今夕四時一同就枕

宗伯今日も晝夜痰痛にて苦惱、夜中むねいたみ打臥候事成らぬ候よし、大病なり、食事ハ昨今少々つ、粥醴等とべ候よしあり、尚又自療にて薬服用也、

三日辛酉曇

晝前晴より日

今朝土岐村老尼來る、宗伯病氣見舞あり、今日如例太郎端午祝義柏餅製造之、晝飯後よりあり、土岐村老尼も晝後入來合せ手傳之、數人三百弱出來、如例處々へ遣之地主杉浦氏、めでとや養母おひで、土岐村元立、久保齋碩へ下女きのを以て遣之、久保齋碩より宗伯病氣見廻として、キスとヒラタ五尾小のこま入、今日被贈之候に付、右返禮として柏餅一重遣之畢、

晝後より又右衛門來る、自然生二本持參被贈之、且先頃より遣し候八犬傳九輯、弓張月四五貳篇被返之、右

請取畢

田口久吾より使札、おきく事昨夜上総より歸宅のよし、みやげあさりむき、めざし五串、さらめ貳把、貝ら等被贈候、右幸便に柏もち一重、久吾方へ遣之、但し久吾方より過日申遣し候、芳野葛一袋被差越之、夕七時過おくれより使札、手製の柏餅一重、數十九被贈之、此方よても同様出來し付、右重へ入數廿一遣之、夕方土岐村元立來診、則宗伯容躰申聞け診せしむ、さしとる醫按了簡もおき様子あり、柏餅ふる舞、老尼同道より歸去、太郎へ弄物龍吐水壺つ買ひ遣し候よし

あり、

宗伯今日終日痰痛胸膈いとくうめき一向は不食あり、夜中同斷但し夜半よりいとみうすらく、八時頃一度、明六時前一度、甚しくいと候よしあり、その後ハうめれおし尤大病あり、予今日々人出入多く柏もちこしらへ候し付何となく多用、且宗伯うめき候間心中穏おらど、依之著述手よ付らぬ、八犬傳九輯十一の卷百十三回分畫一丁、夜よ入半丁餘、共よ一丁半餘稿之、四時一同就枕、

著作堂日記抄

解釋類

考證

⑤ 苗字

本居宣長

藤原源おどハ世々同ト氏の人數志らば多うれば、その内を苗字して分けざまば、いと紛らハキさま、ま、常ふその苗字をのゝ呼びおらひて、むねとあまゑ、これおのづから必然るべき勢、まして、今ハ此苗字ぞ、姓の如くおまゐりければ、姓の志られざらん人おどハ、苗字を正しく守るべきとぞありか、さてこの苗字の苗の字ハ、よしかきことあり、こゝもと名字ありと、むを然書きてハ、名又あざお、紛る、故よろきかへ

る物あるべし。名字と書くむも、何とまゐるふに非ざれども、中昔より、名をも又姓と名とをつらねても、廣く常は名字といひつゝ、姓の小分をも、同く然いひおらへり。又今の人、おのぢ子の事をも、父の事をも、同苗といふ、これも、と同名よて、同姓のよかり、玉勝問

⊕ 恐悦の字義

大田南畝

世俗書狀の文は恐悦といへる言あり、貴人は對して悦を申はことお用ふ。此字恐惶恐々などの恐の字と違ひて、おそまてよろこぶといふ熟字いふと思

ひしは、中山内大臣忠親殿の貴嶺問答をよまば、恐悦相半といへる言あり、よまて字義の誤まるをえるべし。一たびおそま一たびよろこぶ義あり、一話一言

⊕ 女の眉そり齒を深むる事

石原正明

正明、姓ハ平、俗稱春左衛門、尾張の人、文政中七十餘にして歿す、女の眉そる事ハ、黛もて畫らんとての事あり、さるハをえ際のしどけなき處、色るときうすき處おどありて、とろびされむ、それを刺落して、思ふまゝ、お畫くかり、今大うそを刺りさるまゝ、よて、うゝむ物ともおも

ひとらぬも無沙汰なる事なり又をぐるめを色の黄
 をきてきさなけかるをくさん料かり共女く
 物心つきさるおもむきかり俗まこまを元服といふ
 もあらぬ事おごらおとあなりさる意ハクよへり
 年々隨筆

⑤ 千金帖の解

澤田東江

東江姓ハ源名ハ鱗字ハ文龍東江宋禽堂萱舎青
 藤叟玉島山人皆其号あり通稱文次郎江戸の人
 寛政八辰年歿
 大享年六十五

懷素の草書千字文を千金帖といふハ嚴氏書畫記に
 此真蹟はトめ海鹽の姚氏といふ人の家ニ傳へあり

けるが其人秘藏して此帖一字値千金かりと云ふ故に
 千金帖とハ名けさりと補いへり其後停雲館法帖の中
 に摹刻せり又別ニ大字の草書千文あり摹刻共まよ
 ろしらず 東江書話

⑥ 茶

喜多村信節

名ハ信節字ハ節信篤居まど篤庵とも号す

本邦ニ茶のことの古く書見えたるは日本紀弭仁
 六年夏四月癸亥幸近江國滋賀韓崎使過崇福寺云々
 大僧都永忠手自煎茶奉御云々六月壬寅令畿内並近
 江丹波播磨等國殖茶毎年獻之と見えたり是より先

傳教大師入唐の時茶子を將來すともいへれど
 ならず、村上の御時和名抄に茶を載せたり、又西宮記
 三月朔日差遣茶使事承和例云々、また後朱雀の御時
 續本朝文粹に、惟宗孝言が茶讚あり、恵明院僧正が海
 人藻芥に、茶者自上古我朝よりあり、挽茶節會として於内
 被行公事儀式然り云々、橘嘉樹云公事根源御讀經の
 度ごとみ第二日より行茶として僧に茶を給ふ事あり、
 藏入式云、天喜四年三箇日毎夕座侍臣施煎茶衆僧相
 加甘葛煎茶厚朴生薑等隨要施之云々、是ハ全く煎茶
 あり、然るを行茶と引茶と誤り、引を挽と作り、海人藻

然るを云々然る
 と海人藻芥より行

茶と引茶と云々の
 意あり末の海人藻
 芥といふを然るを
 の下まつけて心得
 べし

茶よハ書きとるやうあり、東鏡葉上僧正が實朝へ上
 へ茶を煎茶やら、挽茶やら、まうりがたといへり、
 按ふに榮西葉上僧正が傳へる法を抹茶あり、其時漢
 土いまだ葉茶を用ひず、建久二年四月榮西禪師宋よ
 り歸る、其茶種を持來り筑前背振山に栽う、こまを岩
 上茶といふ、又其茶種を梅尾の明恵上人にも贈り、上
 人之を居處の地深瀬に栽うと云ふ、然るに僧大蟲が
 茶湯記に、建保中葉上僧正と明恵上人と共に入唐し、
 同船にて歸朝すとあるハ非なり、榮西茶を鎌倉右府
 に奉り、茶徳を譽めたる事、東鑑廿二に見えたり、今の

如き挽茶のこの時より行をきとり、嬉遊笑覽

甲乙の聲といふ事 荻生徂徠

徂徠、姓ハ物部、名ハ雙松、字ハ茂卿、俗稱松右衛門、徂徠ト号シ、又護國トモいふ、柳澤侯ニ仕ス、享保十三申年正月歿、

是、享年六十三
義經記、清水にて法華經をよみあひとる、辨慶ガ甲の聲、義經の乙の聲といふ事ありと、聲の高低おりに思ひ、其後ふるに讀經の譜を求め出たり、字ごとと律と叶へて、つけ物をどもすべきやうと定め置きたる物あり、甲の音乙の音として二色あり、げよさらで、満堂の人の感、堪へかぬさる事、いからどら

此比までハ何事も風雅なる世おしけり、南留別志

鑄錢の事 太宰春臺

春臺、名ハ純、字ハ徳夫、春臺一ニ紫芝園ト号シ、通稱ハ彌右衛門、もと平手氏あり、太宰謙翁ニ養ひ、延享三寅年歿、享年六十八

日本の金幣ハ古へ如何なる制ありと云ふことを知らず、中古以來ハ砂金を用ひたりと聞ゆ、銀を用ふること、何れの世より始まきると云ふことも詳ならず、銅錢ハ和銅錢を鑄ての後重ねて鑄ること稀なり、中古より唐の開元錢多く此國ニ渡り、其後宋の錢彌

銅錢の事をいまんとして、先金銀の事を説く、是即ち客よ依りて主を呼起す文法あり、

々多く渡りし故此方よてハ錢を鑄ぎきともなきこ
とかかりきと見ゆ元の錢も多く渡きり明の洪武永
樂錢ハ近代なきバ殊も多く渡きる故日本よて關
東の田地をバ永樂錢よて其直を定めて禄秩をも錢
の數よて幾百貫幾千貫と定めたりかやうは異國の
錢を用ふるごと豊饒ふりし故ハ此方よてハ絶て鑄
ざりしかり當代よ及びて寛永年中ハ始めて新錢を
鑄させらる文ハ寛永通寶といふ昔より有來りたる
異國の錢と相雜へて行ふ永樂錢ハ一貫を以て黄金
一兩よ直し寛永錢ハ四貫を以て永樂の一貫よ直す

當代ハ徳川氏を指
稱すもふり

然きども新錢多く出づるハ因りて永樂も價賤くお
りて其後ハ寛永と同直とある寛文年中ハ又新錢を
鑄る面の文ハ寛永通寶よて背ハ文の字あり世是を
文錢と云ふ寶永ハ又新錢を鑄る寛永通寶の文を用
ひて背ハ文の字あり正徳ハ又鑄享保ハ又鑄る皆寛
永ハ鑄る錢の如く寛永通寶の文よて背ハ文の字
あり數度ハ鑄る錢世ハ行ハきて近年ハ異國の古
錢漸々よ少くふまじり 經濟録

③ 尔とへの別

富士谷御杖

御杖初名ハ成元後御杖と改む通稱ハ專右
衛門成章の男文政六年歿す享年五十六

勝然にあけひと
てて習上谷一家の
詞達ひの名辨か
て、まては、一と通
り詞づらひと
程の事と心得

古今集は僧正遍昭がもとよ、奈良へまうりける時云
云とかける、このは文字へ文字、處よりてハいづき
をうと、置煩はる、脚結あり、此端作この二ツをまき
まへんは究竟あり、もとよハ處をすゑて指す心あり
ハ文字ハ方角をたて、指す心あり、まきバ僧正遍昭
がもとよとハ、其遍昭が在處を指したるなり、奈良へ
とハ遍昭が在處の方角を指せるなり、こま遍昭が在
處に至らん、の志よて、奈良の方へ行くと、の心あり、能
く思ひましくべし、ハ文字ハ其例ひくよ及ばず、ハ萬
葉集は「いさ子どもやまとへまや」古今集は北へゆ

く駕ぞおくあるおどよめるをいふるひお死人ハ、ハ
ハ雅言、ハハ俗言のやうと思ひためり、げは今ハハと
いふべき處をもへとのいふおかり、うへりてゐおら
まハ、へともおとも常いふハ、古言の傳をきるあり、ハ
文字ハ文字の用、かざらりの別あるものおきバ、さる
事ハ惑ハずして用ひましくべし、北邊隨筆

史記秦武陽の事を釋表 伊藤東涯

荊軻秦武陽を輔行とする時年十三と云ふこと、千古
人口は膾炙することあり、しかまども史記の本傳を
熟覽すまきバ、史を讀む補ことの詳おらざるゆゑよて、を

史記董份が評より
十三歳之童子以輔
行、脚亦疎矣と云へ
り、亦、まゝ支那人
よりして誤り來れ
るあり

の時年多少と云ふ事、あるべからず、史は云く年
十三殺人人不肯忤視と、この意は十三の時、人を殺
し、とるゆゑ、人々少年より勇悍あるをおそきて、ろ
くよ目をみあつたものもあつたと云ふことあり、荆軻
が帶行のとき、年十三と云ふ、あらず、十三と云ふ所
まで、句をきりて讀むより誤るあり、若し其時年
十三と云ふとき、殺人人不肯忤視と云ふ一句、何と
も落着おきると補なるあり、十三と云ふさへ幼く、其
よりさきから常々人をとろりたるふや、戦國のこ
とあがらさもあるまじくや、况やとろさるゝもの、目

もみあはせずはあろさきとりや、ときもをかきも
のあり、 秉燭談

㊦ おくり名

屋代輪池

輪池、姓を源、名は弘賢、輪池は其号、又忍池とも稱
を、通稱太郎、幕府の臣、天保十二年閏正月歿す、
享年八十四

謚を死後、尊びて設けたる稱號にて、諱を對して起

まるあり、皇朝まで孝徳天皇の淡海御船に勅あり
て、神武以來の謚を定め給ひしこと釋日本紀見えたるべ

此時を始るべき、續日本紀西土より、周武王の世より其先

祖をあげ、生前の名を稱するを諱と、其徳行を表して諡を作る是臣子の厚意よりいづる所あり、志うるを諡法は善惡の文字分ちたぐるを、後世の偽作して古よりつておれた物なり、其祖先を尊び名をど唱ふるを諱（むかし）して諡を作る人君父は惡行なまばして、何を臣子の分として、其惡字を諡は施すべきや（通志）但し諡ハ爵ある人は命ずること古意あるよ（禮記）郊見え、又徳ある人も、爵なきも諡を命ずることも見えたり、皇國にてハ太政大臣は必諡あり、そまも入道せらるまば諡あり、今佛家にていふ戒名の蓋し諡の

轉トたるものあるべし

⑤ 應唯の聲

本居宣長

古書は稱唯と書きて、乎々止申とよめり、然まば古ハ上とる人はいらふるも乎々といへりと聞ゆ、又萬葉（補）の歌は否も諾も源信明集の歌は（い）かともうともいひはてよ拾玉集歌は（あ）やうやといふ人どもあ（い）あやうやハ否や諾やあり、諾ハ即ち乎々と同じ、今の世も乎々とも字々ともいへり、吉部秘訓抄は唯唯（阿）と被（ま）まと稱唯ハ六度也、猶阿と被出之とある、乎々を阿といへることもあるよや、又同書は云々官

掌敬屈高聲稱唯先有とある鬱音といふある聲を
いへるよりあらん、宇治拾遺物語も、えいといらへと
り、又むといらへておど云へることあり、牟むハ宇と同
ト、今の世の應唯も、宇と牟との間の音まで宇々と
いふ是あり、大方今の世の應唯ハ波伊延伊那伊閑伊
おどハ深く敬ふいらへかり、次ハ阿伊次ハ鼻よりけ
て阿伊次ハ阿々、次ハ乎々、宇々あり、すべて打解けさ
る應唯ハ、多く鼻よりうけていへり、うく種々ある中ハ、
國處よりて聊異あること、も、あるあり、
玉勝間

山崎橋興廢の考

屋代輪池

山崎の橋ハ聖武天皇の神龜三年ハ行基ほさつ造り
たまど、こまより先橋ありて廢せりと云ふ事行基傳
ハ見えたり、但一行基傳ハ神龜二年と云ふ
洪水俄に至り、橋おろき人あまと死亡せしかり、扶桑
水其後桓武天皇の延暦三年ハ朝廷より阿波讚岐
伊豫三國ハ仰せて造らせらる、續日そまも文徳天皇
の嘉祥三年ハ大水よて斷えしを、河橋壞き易きハ、水
の浸噬よ依てありとて、便地を擇びて造らせしあり、
文徳延喜の頃ハ攝津伊賀播磨阿波等の國より、橋板
實録を出さしめて修理せらしむ、延喜其後斷えけるを、

拾芥 抄 天正二十年豊臣太閤朝鮮は事あらんとして、往

還は便せん爲は造らまきとぞ、長さ一百八十間、廣さ

五間、柱數一萬三十八本、土は入る事深さ一丈餘あり

といふ、懼高文集其後まきたえて今ハ舟渡はて狐川の渡

といふ、都名所行基の造りし處ハいづくあり

けん、嘉祥年は造られし處ハ中頃大渡といひし處ハ

やといへり、抄拾芥是即ち今の狐川の渡からん、昔ハ

橋本といひしより、古老の説あり、山城名勝志○今の

よりラフセ 一話一言 橋本の宿ハこの處

④山部赤人の考

安藤年山

年山、初名ハ爲章、後爲明と改む、通稱新助、水府の臣、西山公ハ仕ふ

顯宗天皇の御代ハ、播磨國司來目部小楯といふ人ハ、

始て山部の氏を賜はりたり、赤人も其後トハ志られ

とまきどまきしき父祖の官位ハ國史ハミえ、萬葉集

ハ神龜元年より天平八年までの歌みえたり、志られ

ハ人麻呂よりハ後生あり、古今の序ハてハ同時の人

のやうに見ゆるガ、二人ともハ諸國の椽目おどして、

終られたるなるべし、後世の躬恒忠峯のたぐひまで、

身ハいやしけまども、歌ハあやしくたへある人お

るべし、山邊と書とるらあやまりあり、山邊ハ種姓又

別あり、今按ずるは、万葉集のうち、大伴家持の詞書は幼年未還、山栴之門、裁歌之趣詞失乎鬱林矣とか、れざるをおもへば、兩歌仙の名をやく世はあらわれり、年山紀聞

㊦ あさがほの考

小山田與清

名ハ與清、字ハ文儒、松屋と号を、通稱庄次郎、後改めて六郎左衛門と稱し、まを改めて將曹といふ、高田氏は養はきて其氏を冒し、隱居の後、遠祖の族稱をおこして、小山田氏を稱し、弘化四年三月歿す、享年六十五

あさ^〇が^〇わ^〇を^〇桔^〇梗^〇よ^〇も^〇牽^〇牛^〇子^〇よ^〇も^〇木^〇槿^〇よ^〇も^〇す^〇べ^〇て^〇ふ^〇名^〇よ^〇て^〇其^〇花^〇あ^〇り^〇た^〇よ^〇う^〇つ^〇く^〇く^〇咲^〇く^〇もの^〇か^〇ま^〇ば

〇あり、うほ顔面容彩色よいへる詞あるよし、和訓

琴六の巻加の部下に注せしが如し、萬葉集八の巻家

持贈坂上大嬢長歌の反歌編者曰ふ證歌あり今十四之を略す以下皆同し

の巻末勅國相聞歌おど皆うつくしき花をさはよめ

る細注あり、後よ桔梗をきちかう牽牛子をけよご

し、木槿をむくげおど字音よて呼ぶこと、おれり、か

く異種よて同名あるも其類少ならず、近頃かたかく

ハ一き説をたて、あさがほを一種のものよかどづ

けんとは、是彼論ぜし人多らまどひとつもことよりあ

るハおし、故よ今余が思ふすぢをのべてこと、お辨を

先^{第一}新撰^{桔梗}字鏡^{を説く}本草木名部、桔梗阿佐加保、又云岡止^止支^とミエ、萬葉集八の卷山上臣憶良詠秋野花歌、云々、古今六帖第六家持歌、云々、夫木抄秋部二槿花の條經家卿歌、云々かどよめる、野は生ひとる様もおもひやらるまば、これかハ桔梗をさしてあさぶほといふ證とすべし、又^{第二}萬葉集^{木槿}十の卷詠花歌、云云、夫木抄秋部二槿花の條顯朝卿歌、云々、類題和歌集十の卷秋部一後拍原院御製、云々かどよとるハ木槿あり、倭漢三才圖會八十四の卷灌木類部、木槿俗云無久計木槿、字音訛、云々、按、木槿花有數品云々

自古相誤稱朝顏矣、真朝顏牽牛花譜矣、といひ、いよく心得られつ、云々、又^{第三}堀川百首^{牽牛花}槿花の條仲實歌、云々、^{以下撰集家集物語等より證歌}和名抄草類部、牽牛子和名阿佐加保かどあるハ蔓草の牽牛子あること疑ふ、^一のまばふるくら、三種ともあさけほといひたり、後ハ桔梗をきちらう、木槿を木をちすむくげ、牽牛子をあさけわあど、とけてよべるありけり、
擁書漫筆

日用文鑑上卷終

日用文鑑上卷終

日用文鑑下卷目錄

論說類 訓戒

① 善惡各類ある論

大田錦城

② 通貨論

本居宣長

③ 後世の事物古代より優まる論

本居宣長

④ 風俗の變遷を論む

太宰春臺

⑤ 取租の事を論む

太宰春臺

⑥ 外國の稱號

村田春海

⑦ 介兩の事を論む

太宰春臺

⑧ 梶原景時の論

新井白石

世 駿河大納言の事を論む

新井白石

共 毀譽

貝原益軒

先 學問

貝原益軒

甲 耻心

熊澤蕃山

里 文章の盛衰を論む

室 鳩巢

里 教の説

大國隆正

里 猫を畜ふ説

柳澤淇園

里 鮪と真黒との説

石原正明

里 孝養の訓

中邨惕齋

里 用財訓

貝原益軒

里 樂訓

貝原益軒

哭 修業の心得

松木直秀

書簡類

光 長澤純平よ贈る書

伊藤仁齋

平 立原甚五郎よ答ふる書

柴野栗山

垂 嶋崎岩城両生よ寄たる書

皆川淇園

垂 古山常助よ答ふる書

中井竹山

垂 友人よ答ふる書

釋 六如

垂 増島金之丞よ寄たる書

古賀精里

垂 友人よ贈る書

頼 春水

美 姫井仲明に寄る書

西山拙齋

垂 友人に答ふる書

宇佐美瀟水

夷 巖垣章藏に寄る書

赤松滄洲

堯 三宅尚齋に贈る書

佐藤直方

卒 友人に答ふる書

稻垣白嵩

空 安積覺兵衛に答ふる書

土肥霞洲

奎 觀瀾堂主に答ふる書

人見竹洞

奎 友人に寄る書

稻生魚彦

齋 岡野庄五郎に寄る書

亀井南冥

奎 大槻磐溪に寄る書

後藤松蔭

奎 介堂に答ふる書

岩瀬瞻洲

奎 豊藤五十助に答ふる書

林 述齋

葵 加瀬通義に答ふる書

片山兼山

葵 友人に答ふる書

藤田東湖

辛 某に答ふる書

頼 山陽

日用文鑑下卷

小中村清矩

同輯

中邨秋香

論說類 訓戒

善惡各類ある論

大田錦城

錦城名々元貞字ハ公幹錦城ハ其号通稱才佐加賀の人よして本藩の文學とふる文政八年歿享年六十一

此文骨子を漢文よ
取るといへども文
辞平正よして旨趣
明暢なり初學熟讀
せば大に裨益ある
べし

善と福とハ同類なり、惡と禍とハ同類なり、同氣相求
め、同類相應じ、善を爲せば福あり、惡を爲せば禍あり、
同氣相感ずる自然の理あり、何を以て善と福とハ同

類ありと云ふや父は孝なきは父喜び君は忠なきは

君喜ぶ善人の喜ぶ所あり福も人の喜ぶ所あり是

同類は非ずや何を以て惡と禍とに同類ありと云ふ

や父は不孝なきは父之を惡む君は不忠なきは君之

を惡む惡人の惡む所禍も亦人の惡む所是同類は

非ずや古人吉凶の二字を以て善惡とかし禍福と

す其一方を知るは足まり然らば惡を爲して福を

願ふは火は就きて冷を求め水は入りて煖を索むる

は同し必無の理あり 梧窗漫筆

通貨論

本居宣長

然らば云々上文同
氣同類等の字と對
して味ふべし

鈴屋の俗文、おのつ
らら一家獨歩の法
あり、此篇の如き最
も味ふべしとを

金銀通用ハ其法よりて大に得失のあるべしなり
先此金銀といふ物を上もなき寶までハ有きども實
ハ飲食の代にもあらば衣服の代にもあらば總て何
の用にも立ち難きものあるは是を通用するは其何
の用にもたぬ物を以て世の中の一切の用を辨ト
さる仕方ある故は其仕方依りて得失ハある事
あり其仕方ハ先第一は天下は通用する所の金銀
の多少依りて大に得失あるべし抑金銀を廣く通
用する事ハ慶長の頃より始まれる事にて其以前ハ
只錢のみの通用かりき然るは此金銀通用始まりて

世ハ困窮の句、上の
世上の困窮は對
見るべし、

ハ、甚世上の便利にして、尤自由宜しき事あり、
諸通用の金銀ハ、隨分以下多きほど便利にして自由ら宜しき
あり、然きどもそれな付て又失ある事多く却て世上の
困窮は及ぶ基ともある事あり、
らくて當時天下は通
用する金銀ハ殊の外は多くして、甚便利ハよき事お
るよ、今の人の固よりうくの如くある世は馴れたる
故よ、金銀の甚多きといふ事をあらば、便利の甚宜し
き事をも覚えざして、却て世上通用の金銀の、拂底よ
て得がたきゆゑよ、世ハ困窮する様と思ふハ、商人心
よして未をのこ思ひて本をあらざるものあり、今の

金銀の得がたきハ
云々、前段世上通用
の金銀拂底云々よ
對して見るべし、

世は金銀の得難きハ少き故よハあらば餘り多きよ
り起まる事あり、其道理ハいうよといふよ、米穀を初
め、其外何よても萬の物を取引するよその正物を取
引するよりハ、價をたうりて金銀よて取引するが格
別よ便利よき故よ、昔ハ正物よて取引したる事をも、
今ハ皆金銀よてするやうよあり、其外萬の事皆金銀
よて取計らふ様よありて、次第よ金銀の取やり多く
繁くあり、其とりやり駈引の間よ、尚ほ又さまざま便
利ある仕方よある、箇様よ萬物萬事皆金銀よて間
の合ふやうにふるハ、こき金く世上通用の金銀の

今右の如く云々、上の金銀のとりや、り云々と對し、又金銀よ何事も濟む云々、上の万物万事金銀よて間の合ふ云々と對し、味ふは甚得がさたやうに覺ゆるおりの句前の二ヶ所の得がさきの語と相應む

地体が多くて云々、前後は應むるところ、一篇の肯綮よく味ふべし、實は得がさくもあり、實よの詳注目すべし、實は得がさくもあり云々、玉盤珠を弄するが如く宛轉する處味ふべし、

甚多きが故あり、少くては、いふほど便利よき事有りても、箇様は廣く何事も用ひぬることあり、さして昔は金銀を取引する事も、今より少く、又金銀よて萬の事を取計らふ事も、稀あり、故は、人のこまを願ふ心も、今の様は甚しくあらざり、を、今の右の如く世間は此取やり駈引をげく、金銀常は人の耳目は近く親しく、又金銀よて何事も濟む故は、人毎よこまを得んことを願ふ心も、昔より格別は甚しく切あるより、甚得難きやうに覺ゆるあり、総て至て得難き物の、これを得んと欲する念も無きも

のかるよ、今の人の金銀の得がたきを憂ふるは、地体が多くて得がさくならぬ故あり、さして又何事よつきても金銀の働をげく、忙がまじき故は、實は得がたくもあり、得がたきより、少き様は思ふあり、例へば、毎年盆前と極月よ、常よりも又格別は金銀逼迫して、いよ／＼得がたき、いふある故ぞ、此時とても世上の金銀常より少くあるよあらば、常は適をたぐく金銀をさへ二季よ、出いて働らる事おれば、常よりも多き善あるよ、却て左様は得がたき事、常よりも又やりひきまげく、金銀忙がまじきが故あらば

一篇の精神句々前
に應じよく味ひ
るべし、

や、是を以て総体金銀の得がさきハ少きゆゑハあ
らざる事をさとするべし、其本を尋ぬまば、實ハ世上
通用の金銀甚多くして自由ノ手まをるら起りて、
何事もこまをを用ふるやうハあり次第ハ働忙がま
くおまきるよりて、其多きよりもなほ忙がま
方ハ勝つゆゑハ得がたくて少きやうハ思ハるハあ
り、秘本玉くしげ

④後世の事物古代ままさきる論

本居宣長

後世の事物ハ、古代
より次第ままさり

古へよりも後世のまさきること、萬の物も事も

ゆくものありとい
ふ事、今日ま在りて
ハ珍らしげなき論
なき、此時代まて
ハ古代の事ハ総て
よく、後世ハ之ハ及
ばぬが如く説きか
し、甚しきハ工事の
如きも、一ハ古代の
質林を称して、後世
の進歩をハ概して、
驕奢とさへ論下た
りき、然るは此篇其
時代まありて早く
此論あり、卓見とい
ふべし、
あよふくといハ格別
といふ程の語あり、
此一つよて云々、一
句冒頭古へよりも

多し其一つを言まむ、古へも橘を知らびなき物ま
して、愛でつるを、近き世ハ、蜜柑といふ物ありて、此
蜜柑ハ較ぶれば、橘ハ數も知らざきおされさり、そ
の外柑子、柚、九年母、だいしおどの、さぐひおなき中
も、蜜柑ぞ味ことまぐれて、中まも橘まよく似て、こ
よかく優まきる物ある、此一つよて推測るべし、或ハ古
へまハかくて、今ハある物も多く、いまへを惡くて、
今のを善きたぐひ多し、こまをもて思へを、今より後
も又、いらいらむ、今ハ優まきる物多く出來べし、今
心よて思へを、古ハよろづ事足らざ、ありぬ事多う

云々と正しく呼應
を、
今より後云々、前段
今より優まる者云々
と應む、
此一段ありて冒頭
をトめて千鈞の重
を覺ゆ、

り々むされどその世は、さもおぼえだやありけん
今より後まゝ物の多く善きがいであん世も、今を
いふか思ふべけきど、今の人事とらずとハおおえぬ
が如し、玉勝間

③ 風俗の變遷を論ず

太宰春臺

我父ハ寛永の中頃よ生きて、八十八歳よて享保の中
頃よ終まり、大猷院殿嚴有院殿の御世を経て其時の
事を常よ語りつきば、我幼きより聞きて耳よ熟せり、
我ハ延寶の終りの年よ生きて、常憲院殿の御代より
此うとハ、まさしく此身に歷つきば、童稚の時より是

昔の事共を言出
て云々、此一段隱然
下段風俗變遷の事
まつきて言へり、

猛虎も鼠とあり云
云、多少の感慨、時弊
を見るも之を救ふ
の路なき意を寓そ、

まで五十餘年の事をバ目よ見たり、父のかたり聞せ
つると、我まのちと見つる事とを、思ひ續くまば、百
年の餘變歴々として目の前よ有るがごとし、人と物
語をる序よハ昔の事共を言出して、或ハ笑ひ、或ハか
げき、且ハ治まる御世よ生きて、干戈の昔をあらば、安
くいね、静うに起きて、嘯き歌ひて明一暮を事をよろ
こび、且事ありし時にあはむして、猛虎も鼠とあり、寶
劍も鉄とある事をぞいきどほる、かくて此世の治ま
る事久しきに依りて、上より下まで心ゆるきて、ひ
たすら歡樂のミを營む故よ、舊き事ハたうらうらば

大々々舊き事よか
云々上の此世の治
まねる事久しきよ
よみて云々と對し
て味ふべし

ありて、新しき事を珍しとて、ちやをどに、人の詞身
のさまより始めて、衣服器物屋作りまで昔にらり
ぬき、まゝして人間種々の儀式或ハ遊宴の樂など、新
しき事ども年々よ出來りて、古き事ハいつとかくを
たきまつ、大々々舊き事よハよき事多く、新しき事よ
ハよき事少し、風俗の移りかゝる事目の前よ歴然た
り、其中に昔と今と寒暑の如くかゝるさへあや
み見るに、冠を履にもき履を冠に着るやうなる事あ
るこそ不思議なき、つくづくと百年此うさの風俗を
思ひくらぶるに、余所の事をバ置きて、江戸の人の風

男ハ冬云々上の風
俗の移りらる事
云々よ應む

江戸の婦女云々上
の寒暑の如くら
るべし、

俗こそ昔にかかりたき、我親しき者の中に、慶長元和
の頃生きたる者男よも女よも有りて、寛永の頃を年
の盛よて經よりといふよ、男ハ冬草のうちうけ草の
袴を美服とし、女ハ紫の草の襪子をたくをよきけハ
ひとせりといふ、其襪子の我をさなれ時迄も残りて
有しかり、略中江戸の婦女外よ出るに、昔ハきま、とて
黒き縮よて頭面を包み、目計りをあらハけるが、其
後綿よて頭面をつ、ミハ、我二十あまり寶永の頃
までちやかりき、今ハちひさき玉たを頭上よいた、
きよるのよみて、面をばらちさらし、わねやうなる顔

よて道をゆくさまおもをゆげよも見えぬ男の面を
あらはにべきものあるよ此頃の編笠の肩の上まで
かゝるをうぶるハ珍しくらば胃の如くなる帽子を
ぶりて面をうくも常の頭巾は覆面の如く
ある物をつくりつけて目をうりをあらはして道を
ゆくもあり昔の女のごとく人目を忍ぶ者の多くか
りたるよ又此頃の男ハ小袖の裏を紅よ或ハ紅
のもどぎぬを袖口長よして腕をまとふをうまにひ
らめうたるもの多く見ゆ女ハうへりて縹（ひらめ）の裏白き
裏おどを着るあり是等ハ男女處をかふと云ふべし

又昔ハ以下冠履異
處を説く

又昔ハ士君子こそ學問し歌よみ詩作り連歌し或ハ
管弦をもてあそび少くどきる品あまど琵琶かど
を弾トて平家物語し筑紫箏幸若の舞かどを習ひて
樂しあへりけき三味線を鳴らし浄瑠理をかよる
事唯市中の賤き者のこかりしをきさへおほうと人
よかくして忍び忍びよ習ひしをうし今ハ工人商估
の中よてや富める者ハ學問し詩歌管弦を玩び少
（前）
の文と對し味ふ
しくどきる品あまど猿樂かどを習ひて樂よとして
浄瑠理三味せんかどをちうづけぬたぐひあり士
君子ハうへりてよきたのしみを知らぬひとをら浄

それやうある處よ
て云々上文夫さへ
大方人まかくして
云々と對してさるべ
し

春臺文氣守往々支
那古文粹より轉じ
來る所あり此篇の
如き最も然り味ふ
べし

るに三味せんを好みて、それやうある處よておめだ
憚らば賤き所作をして人の玩とある、薄祿の士のこ
ゝ非だ諸侯貴人も此たかひ多しと聞けり是らも
冠と履と處をうふといふべし(下略) 獨語

取租の事を論む

太宰春臺

當代ハ田租を取るは二法有り、一つハ視取二つハ
ハ定免あり、凡そ年ハ豐年凶年有り、五穀の登るは上
熟中熟下熟あり、視取と云ふハ毎年の秋ハ成り、代官
並ハ手代等の役、其地を巡行して穀の熟不熟を視て、
上熟ハ多く取り、下熟ハ少おく取る、俗ハこまを

免と云ふ、代官の巡行して見ざる通りを其領主ハ告
げて、領主より其年の免を定めて、文書を民ハ下して
租を徴を、是を免狀と云ふ、免狀下りて免狀の如くハ
收納を、故ハ是を視取と云ふあり、定免と云ふハ十年
二十年ほどの内よて、上熟下熟の中を取りて是を定
法として、年々定法の如くハ收納をるあり、上熟の時
多く取らず、故ハ下熟の時ハ及びて民其上を怨むる
ことあり、此法ハ則孟子の云へる貢法よて、夏の代の
法あり、孟子ハ龍子が言を引きて惡しき法といへど
も、彼ハ別ハ謂あることあり、日本の古ハ暫く論せ

日用文鏡一巻

こ、小子細ハとある辞ハ、當時の俗文の通語マて、今世ハ其故ハといふ程の辞ハあり、此段の叙事殊ハ支那古文の口吻あり、

だ、當代ハハ定免ハ勝マきたる善キ法ハハハ視取ハ甚
 一ク民ハ害あり、子細ハ代官の秋成を見るを今俗ハ
 毛見ト云ふ、代官の毛見ハ行く時、其處の民數日奔走
 して供具を營メ、道を除ヒ、館舎を洒掃シ、前日より種
 種の珍膳を調へて其來るを待つ、當日ハハ庄屋名主
 かど云ふ者、人馬肩輿を率ゐて境まで出迎へ、館ハ到
 きば種々の饗應をス、其上ハ種々の進物を獻ジて
 其歡樂を極め、手代等ハ云ふハ及バ、僕従の至て賤
 き者までニ補ハ、其品ハ應ジてそまシ、金銀を贈る
 が如くス、其費幾許ト云ふことを知らず、若少ハ彼

等ハ心ハ満チたぬことあまハ、さまハの難題を以て
 其民を虐げ苦シめ、其上ハ毛見スるハ及ビて、下熟ハ
 上熟ハふりト云ひて、免ハを高くス、若饗應を厚くシ、進物
 を重くシ、從者の賤き奴までニ補ハ、賂を重くシて彼等
 が心ハ満足シまハ、上熟ハも下熟ハと云ひて、免ハを下シ
 是ハ依りて里民萬事を閣シ、代官の悦ぶやうハ計
 る、代官の毛見ハ行く其利甚多く、從者までも許多の
 金銀を取るハ、頻ニ、皆上ノ物を盗ム、毛見の時ハも
 あらハ、平日も民の處より代官並ハ手代等ハ、賄賂を
 輸ぶと、其限りハなく、故ハ代官の輩皆小祿ハを

民の痛云々、上の見
取、甚しく民の害
あり以下の意を結
ぶ、

ども富封君はひとしく、手代等に至るまで、僅に二三
口を養ふほどの俸にて、十餘口を養ふのみならず、鉅
万の金を蓄へて、終に與力旗本衆の家を買ひ取り
て榮花を極む、かくの如く代官の私曲をあり、民の代
官は賄賂を輸ぶ状に、純昔久しく田舎に在りて、親
く見聞したることあり、是偏に視取より起き、民の
痛、國家の害と云ふは是あり、定免おきば毎年の毛見
まも及ばざ、定まざる免の如く收納をること相違お
し、然るに民より代官は賂ふこともおけき、里民の
役使せらるることおかく、金銀の費ゆることもおき

少く高免云々、更
は一步を進めて説
く處却て定免の利
を明はるる手段

今の世の田租の法
云々、上の當代は
定免は勝るとる善
法ありを結ぶ、
大聖神禹の法云々、
上の夏の代の法お
りを結ぶ、

故は民の苦あり、さる故は少く高免は取りても定
免は民の爲に利あり、毛見と云ふことおけき、代官
を置くまも及ばざ、代官は口米と云ふことありて、
許多の米を上よりたまはる、代官を置かざれば口米
出でぬ、是亦國家の利あり、今の世の田租の法定免は
勝ることおくと云ふは是あり、大聖神禹の法おき、
言ふも愚あるべし、
經濟錄

④外國の稱號

村田春海

春海姓ハ平、名々春海、字ハ士觀、織錦叟と号し、又
琴後翁とも稱を、通稱平四郎、江戸の人、文化八未
年歿を、享
年六十六、

古へ外國の通好せし國あまそ有るが中又三韓渤海
ふどの類は、彼全く職貢を修めされば、蕃臣の列に置
き給へる事、更は論なく、唯漢土をばそのふまゝか
し給はば、我々敵體の國よかり給へるあり、彼をさし
て唐國西土といひ、又唐帝おども國史に記されたり、
あうまが今の世よても是よあらひて、西邦西土、或は
清國清帝おどいひて有るべし、此も穩當なる稱あり、
こゝふ又我國の學をる人の、世の儒生等が彼を中夏
中國おどいふを惡みて、夫を矯むとして、漢土を戎狄の
ごとく言ひおも輩のあるも、却りて古の制よをむけ

我より彼をいんこ
と一段上文我々敵
體の國よかり玉へ
るおりの收結

り古の天皇、聖人の道を尊み給ひ、文物制度皆彼を師
とし、學び給ひぬまば、さし言ふまじき事あり、我より
彼を見ん事、宋齊梁陳より、魏秦燕周をみるごとく、ふ
有ぬべき事あり、時文摘紀

② 介兩の事を論む

太宰春臺

日本の古の稱は如何なる制ありきといふこと詳あ
らむ、當代は京都と東都と、兩所は官局を建て京都は
神氏、東都は守隨氏よ命トて大小の稱を作らしめら
る、東國は守隨の稱を用ひ、西國は神氏の稱を用ふ、民
間よて私よ稱を作ること許さむ、稱を作ること

孔子の聖謨云々、先
こをを継ちて後と
きを橋ます、

得ざるのいからず、秤の棹よても損トたるを、私よ修
補をる事をも許さず、又神氏の秤を東國よて用ひ、守
隨氏の秤を西國よて用ふることをも許さず、若此法
を犯を者あまば、兩局の徒見つくるよ隨ひて、其秤を
奪ひ取り、衡を折りて棄つ、是國家の法令よて制禁甚
嚴かり、度量衡の三つの中よて、唯此法のみ至て嚴密
かり、秤ハ微細なる物よて姦をかーやまき故あるべ
し、謹權量とのたまへる孔子の聖謨よ合ひて、目出た
き法令あり、然るよ異國よてと十錢の重さを一兩と
し、十六兩を一斤とす、一斤ハ百六十錢あり、斤より以

物よ隨ひて斤兩同
トウらば云々、上段
金銀藥物絲綿鹽肉
何よても云々と正
し相對を、
黄金ハ四錢八分云
云、波瀾の文法

上ハ幾斤と數へ、斤の下ハ幾兩幾錢幾分と數ふるこ
と、金銀藥物絲綿鹽肉、何よても輕重を以て數ふる物
ハ、皆此數を用ふ、日本よてハ物よ隨ひて斤兩同トか
らず、黄金ハ四錢八分を一兩とし、銀子ハ四錢三分を
一兩とし、餘の諸物ハ大抵四錢を一兩とす、或ハ五錢
を一兩とをる物もあり、斤よ至てハ百六十錢を一斤
とするハ通法よて、二百錢を一斤とをる物もあり、二
百十錢、或ハ二百五十錢、或ハ三百錢を一斤とをる物
もあり、尋常の粗大の物ハ斤を以て數へず、唯十匁百
匁と數へ千匁よ至まば一貫匁と數へて、其上ハ百千

常の人惑ひやすく云々、遠は前段秤ハ微細なるものよて姦をかゝ易き故なるべしと應む。

万貫文といふ貫ハ則錢一千文かり、又ハ則錢の字かり、かくの如く幾文と數へ上ぐまハまざらハしきこと、
と、お、し、介、兩、よ、て、數、ふ、る、物、ハ、上、の、如、く、介、兩、ハ、不、同、お、る、故、ハ、常、の、人、惑、ひ、や、ま、く、姦、猾、の、民、欺、詐、を、か、ゝ、や、す、異、國、の、如、く、ハ、介、兩、を、バ、一、同、ハ、定、め、ら、ま、ん、こ、と、政、事、の、便、利、お、る、べ、し、
經濟録

④ 梶原景時の論

新井白石

景時が讒諂その罪死よあたれり、補 況んや之よ加ふるよ反謀を以てをるをや、大名等がこきを訴へしこと君側の惡を掃かむとするの謂ふきよあらむ、義村が

先義村が言を掲げ、さて廣元が舉動を議し、後時政の施爲を斷ずる處、正兵百萬列を整へて、敵軍と違むもの、如し

その積惡定めて羽林よ歸し奉るべし、世のため、君のため、討せどんハあるべうらば、然れども弓箭の勝負を決せば、また郡國の亂を招くよ似たりといひし事、深謀遠慮ありといふべし、廣元十日を過ぐるまで、其事を披露せざし、思慮あきよあらむ、其心も、今彼等が申狀よよりて、景時を罪せられむ、こまらの詠やむことあるべうらず、さらんよ於ても國家黨人の禍よ堪へざるべし、彼等が怒のたこさむを待ちて、景時して謝せしめむと思ひし、あるべし、されど事既よらくの如く、衆怒當るべうらむ、時政執柄の上首と

上は必一罪を得て
こまを誅すべし
いふはあるはとい
ひきて之を待つ所
以を論中て、更は必
彼を死地まかるん
事を思ひしありし
決したる筆力所謂
老吏獄を断るる法
味ふべし
若し然らざらんま
ハ一段上の義村の

して敢てこまを決せず、景時西奔の日に至りて忽ち
討手をさしむくその姦計ねるべし、其心は思ふ所
大名等が申状よりて之を誅せば、刑殺の權は汝下
より出るあり、必一罪を得てこまを誅すべしといふ
あるは、さまは彼が去り任せてこれを問はず、來る
およりて是を追ひ、其進退をきかめて叛らむとい
刑殺其下より出るをたもふのいふもあらざら
らざ彼を死地まかうん事を思ひしありし、も然らざ
らんまは、彼を止め鎌倉を去りし及びて、速く其罪
状を按じ、其奮功を議し、其死を宥め、父子悉く流刑し

言と對しるべし

先其事を叙して後
其得失を論じ、正し
是論文の正體あり

處せらるべき事はあらずや、も命を受けざらむま
ら、其時よ是を誅せらまん事はいふま及び

讀火餘論

駿河大納言の事を論じ

新井白石

初め左大臣家竹千代殿と申奉り、大納言殿國千代殿
と申し、時御父將軍家國千代殿を愛させ給ふ事深
くして、世繼の君をたてんと思召し、さだめたるは、竹
千代殿の御乳母春日の局が、御勝の御方よつきて誅
へしうば、駿河の御所大におどろろせ給ひ、急ぎ關東
よおらせ給ひて、およとあく竹千代殿をたうとませ

給ひ、國千代殿をば事こととおくごさせ給ひ、又内
内ら將軍家、嫡子退け、少子立ん事ハ天下亂るべき
基ありとてさまは御教訓あり、竹千代殿のをさ
かき御心よも我ゆゑかく退けらまんよハ、父の世の
為よかかきそしを殘させ給はん事、おろき事か
しとおおろめされ、御耳のうときやうよかきしり
ど、將軍家も大御所の仰せおろきし事ども、思召捨て
がさくて、終よ竹千代殿を御世繼とハおさせ給ふ、こ
き故よ御兄弟の中もたひらうからだ、大納言殿終よ
ういおられ給ひぬと、世の人よかいひも傳へ、筆よも

やごとかき御事と
ハ、高貴の人の御上
の事といふ意あり
やごと、うたてや
んごと、讀むなり
己むことかきの我

記せり、うけ難き事ともあり、抑大相國家と申ハ篤恭
の御徳をあらせ給ひ、近代の賢主よてわさらせ給
ひし御事あり、いりてかく理なき御心ましますべき、
是皆妬言深き婦人女子の口より出で、物の心をも
こきまへぬ人の私の腹をもて公ある御心をもられ
るより成りし説あるべし、今も世よ有る事よて、さら
ぬいやしき家よもか、る一大事の事、外人の志るべ
き事よハある、まいてやごとなき御事を、何もの
かく聞も傳ふべきされど、かゝる事ハ古への賢聖の
人と聞えしも、世の疑をば逃またまぬ事おろかり

かり、

た[○]い[○]き[○]證[○]あ[○]ら[○]ん[○]よ[○]は[○]う[○]と[○]が[○]ひ[○]破[○]る[○]べ[○]ら[○]ざ[○]き

ま[○]ば[○]其[○]證[○]の[○]爲[○]よ[○]一[○]つ[○]の[○]物[○]語[○]を[○]爰[○]に[○]記[○]す[○]べ[○]し[○] 補行

と國千代殿いとけなく渡らせ給ひ一時鐵炮うつ事を
稻富に學ませ給ひ、元和四年十月九日、西城の隍の
邊、鴨のいでありしを、こゑとの橋のうへより、鉄炮
よてうたせ給ふ、あやまとせたまへであさりぬふ
らく悦ばせ給ひ、御母上の御方、參らせらる、御臺所
まよ悦ませ給ふ事淺うらば、此夜將軍家入らせ給ひ
し、彼鴨を御あつものよと、めて、御酒を、めら
る、國千代君の手づうら得給ふよ、聞しめし、將軍家

も御心地よげよてさるよてもいづくよてう得たり

けん^レとありしよ、ありしやう御物語有りよまきば、まこ

しめしよあへども、御箸をおげ捨給ひ、何者の供よ侍ひ

て、かゝるふしぎをばふるまはせたりん、抑我城も

父御所の新よ修し築うせ給ひ、我よゆづらせ給ひ、我

まよ竹千代殿よ參らよべき所あり、それよ國千代が

身よして其城よむらひ、いづうら鉄炮をもちつ事、上

を天道よそむき、且よ父御所の神慮のほどもをかり

がと、下よ竹千代殿のかへり聞きたまはん事も、其

ま[○]い[○]かり[○]あ[○]き[○]よ[○]あ[○]ら[○]ば[○] 上の御心地よげよての [○]以[○]の[○]外[○]よ[○]御[○]氣[○]色[○]を[○]こ[○]ね[○]て

その日彼御供云々
上の何者の供も侍
ひて云々の收結

御臺所の御方まで
云々、又此物語ハ世
まも云々、上の正
き證あらんまハ
云々ハ應む、

世の傳ふる所の云
云上の私の腹もて
云々と對し見るべ
し、

御座をたせ給ひ、その日彼御供も侍らひ、人々た
ごさきて御不審をかうぶる、其時御前もありあふ女
房さちの後、老いて家も有りしが、御臺所の御方ま
て仰せらまき、事か、り、と、語、り、と、あり、又此物語ら
世もあまねくおれる所あり、此言葉まで寔に深き
御心の中をおし、ま、う、り、お、む、世の傳ふる所の聞きひ
が、あるを知るべきあり、その外此殿の事よつきて
ハ、御父子兄弟の御中の事ども、いろく世も傳ふる
事あり、ま、べ、て、う、け、が、さ、き、事、ども、あり、
藩翰譜

毀譽

貝原益軒

益軒の文識、平正
よしく明晰あり、初
學之を學ば、を、と
へ及ばざるも、虎を
画きて狗は類する
が如き弊あらるべ
し、

我が身の行ひの善惡ハ、世人のなめそしを、あおが
ちよ常よして喜び懼るべうらだ、道理をわて法
とをべし、まご行ひ道理ようあ、世こそりて毀る
とも懼るべうらだ、まご行ひ道理よ背う、世舉りて
譽むとも喜ぶべうらだ、よき人は譽めらま、あき
人は毀らる、こそ君子といふべけれ、人ごとよわ
かる者、は、う、へ、り、て、疑、は、し、多、く、巧、ま、し、て、か、ざ、ま、る
人あるべし、
大和俗訓

學問

貝原益軒

およそ人の不孝不忠もろくの惡を行ふ、慾を恣

前段専ら知のおろ
るべうらざる事を
説き、最後知を開く
事ハ學問云々の一
句を以て、題意を收
結を、千鈞の力あり
といふべし、

よし、身をほろむ、家を不ろぼをいとる、何より
よまざるや、知あけまばかり、又善を行ひて家をおこし、
身をたもち、たままきを得る、何の故ぞや、知あまばか
り、知あまをよく善惡を志る、善のおまべき事を志り
て行ふひ、惡のおすまどき事を志りて行ふひ、此故
よし、知ハ、身の内の大なる寶あり、學者道は志さば、知を
求むるを第一とまべし、知をひらく事ハ、學問の功よし
あらざるべし、成がごとし、大和俗訓

ⓐ 耻心

熊澤蕃山

蕃山、名ハ伯繼、字ハ了介、又了海、一作、蕃山、息遊
軒等の号あり、京師の人、備前侯に仕ふ、元禄四年未

此篇文辭序述ま
て解し易く、而も照
應あり、波瀾あり、心
を落めて能く味ふ
べし、

年八月歿す
享年七十三

心友問ひて云く、今の世の幼少の子ハ大方知藝能
あるがごとし、^{くか}むろし、きうざり、秀でたる様ある
者多し、然るに世間の人ハ次第に劣りゆく事ハ心得
がたき事よて侍りと答へて云く、^かあうり、田まう、
る稻も^か晩稻むど取實おほし、今時の子共の利根ある
は稻の早稻の如し、おとあま成るほど知慧の取實を
くおし、其上平人の利發といふ物ハ大方鈍ある物お
り、さらへべの瓜ぐらへして赤面し、人前よてものい
ひりぬるを^おあき^ららう^よして^耻の^心ある^故あり、人

よ存するものハ耻心よりよきハあし、耻の心明らるる者ハ、學問してハ君子の地位よもいと、たとひ無學までも、平生も人からよく、軍陣よても、武勇のはたらき有る者あり、昔の童どもも、爪ぐハへる者おほかり、故に成人よ隨ひて、一役の用よ立つ者あり、今のこらハ、人をめせず、人前よても、利發よものいひ、立居ふるまひよし、この故に成人をる程、用人よ選ぶべき人をくおし、人の親たる者徳をいらざれむ、耻心ある子を叱り、威して、耻心を亡おし、耻心なき子をほめ、愛して、いよしく、わこらむ、賢才ハ日

日におとろへ、驕吝を日々よ長むる所あり、かあむべし、集義和書

㊦文章の盛衰を論ぢ

室 鳩巢

此篇文字ハ稍高尚
よ過ぐるものよ似
よとせど、全骸の結構
おのづから一家の
格ありて、模範よ備
ふべしとす、

西漢の文章ハ、奏疏制策の外、賈誼が過秦論、司馬遷が答任安書、司馬相如が論巴蜀檄、揚雄が解嘲、此類猶多し、其文大抵雄偉高邁、後人の及ぶところよあらば、東漢以後文章衰弊して、振をば、六朝よ至りて、四六俳偶をもて、工とせしらば、規模蕩盡し、氣象萎靡して、觀るよとるものなし、唐よ至りて、その餘習いまだ除らざりし、韓退之、柳子厚の二子、いづきも超絶の材をも

道濟天下之溺
らず、一向のづ
ら其見識を見るべ

て一生の力を盡くし、古今の言を陶鎔して、自ら機杼を出しけき。其文上西漢を追ひて、殆過ぎたりともいふあり。東坡が韓文公の碑に文起八代之衰、道濟天下之溺といひしが、道濟天下之溺は、志らば、文起八代之衰といへるも異論なき事あり。誰う志らばといふべし。其後五代を歴て漸々衰へるを、歐陽東坡の二子相繼ぎて出て振起せしむば、文章ふと、びいよ一へは復しぬ。其文光明正大、又韓柳は追配して羞ぢざるべし。是をもていふは、韓柳歐蘇を文章家の大宗とす。古今文章は、おいて一人も非議するものある

をきらば、さき明朝に至りて、詞臣文士多く出て、文章世は盛なり。劉基、宋濂、李夢陽、何景明が徒、名を一時は擅し、大家と稱せしむども、韓柳歐蘇の文は、おいて一言も雌黄を下を書かぬ。おもふよふらく慕尚して、欽服しけらし。其外文章をもてきこゆるもの、唐順之、王慎中が徒、各一家の言を立つといへど、いづまき韓柳が遺流をくみ、歐蘇が餘波を揚げざる者ある。然るは文章は時運と盛衰する物なまば、明の中葉より以後、稍々衰へゆく程は、平易あるは鄙俚とあらず、簡古あるは剽竊とあり、をきより天下の文章科擧

帖括の習は落ちて、是を時文と稱せしむば、古文を見
るべからざる事におとにさり、此時は當りて古文は
志ある人世は輩出して、復古矯俗は急なり、前韓柳
歐蘇が文をこそ、赤幟とせしむ、篇ごとくは、掄揚し、句ご
とよ品藻せざるを、あし、あうあきど材識高ならず、蘊
蓄深うらざるよとて、その所作の文を見るよ、古よ
似て、古よあらば、雅よ似て、雅よあらば、最後は李攀龍
王世貞出て、その平易よて、庸俗よちりきを厭ひて、相
與よ奇怪の文を造作し、狂蕩の論を濶張し、沈洋自ら
恣よし、一世を鼓動せしむば、四方の文士靡然として

覺え侍り此文ハ人
よ對して語る跡は
書きとるものふれ
バ侍りともいふお
まじ、常の文よハ覺
えぬといふべきと
ころあり、

歸依せし程は、號して文章の主盟と稱し、きさまは滄
溟鳳州も常前韓柳歐蘇が文をは、褒稱して、終は非議
する事をきく、鳳州は晩節よ及びて、文友と文を論
じて、や、後悔して、平正よあへる志あり、うども及
ばざりけるよ、饒謙益が列朝詩集よ見えきと覺え
侍り、志るよ、今文章をもて、自ら許を人の王氏が
棄餘を拾ひて、彼が四部稿を師祖とすと見え、又鳳
州が心よたがひて、反りて韓歐を毀るこそ、いと意得
ぶ、志定めて、ふりき意もあるふら、翁など
が小見よてあるべき所よあらず、
駿臺雜話

● 教の説

大國隆正

隆正、初め野々口氏を稱し、後大國と改む、通稱を
匠作、佐紀廻屋と号し、又如意園ともいふ、明治四
未年歿也、
享年八十、

たのまづねといふ、音ハ萬國同トくて、言語々萬國同
トららば、道々萬國同トくて、教ハ萬國同トららば、天
竺までおこまる佛教々、幽冥を旨として、顯露よこと
そだたり、唐土までたこまる儒教々、顯露よ局^{カキ}として、幽
冥をかこらば、この日本の教ハ、幽顯分界を旨として、
天地の始をバ幽冥までとき、今日の事業々、幽冥をな
なきて朝家ハ服事す、をへといふことのおろろを

考ふるよ、古典ハ愛の字ををいとよめり、鴛鴦をを
といふも、あひ愛む鳥をまばいふなり、されををいと
いふことばハ愛字の義と、惜字の義とふとつありと
するべし、へふるとをさらくハ、皆迎へ合をること、ろ
まで、愛とおもひ、惜とおもふ心へ、迎へあをするしわ
ざを、をへをいふといふふなり、善人をバ愛しとれ
もふ心より、善きうへよもよろんとをへ、悪人を
惜しとおもひて、直ることあらんうとてをいふ、
の佛教儒教を借り用ひたまひて、中昔より民をこち
びきたまへるも、萬民を愛しとれもほし、惜しとれも

本をあまりよあんあまらるれば佛者よまき儒者よまき本學者よまれ人を教ふるほどの人の愛へ惜ふの心をむづさび人を善道へちびくべきありさてこの國の故事よよりて人を教へ導くものを世よ和學者國學者あどいへどあされる名稱よあらびよそよてハいろよもいへむづらハ本教本學といふべきあり古事記序よ太素杳冥因本教而識孕土産嶋之時元始綿邈頼先聖而察生神立人之世とある本教ハ儒佛の教よさらざりし世の教をいへるかりされバこのくふの古事を本教といふべくそのまかびを

本學といふべきあり 嚶々筆語

猫を畜ふ説

柳澤淇園

此篇並よ次の鮪と真黒との説等字句簡潔よして意味周到せり所謂寸鉄人を殺すものと云ふべし

猫を飼ふもの多クハ猫をやハかふことをあらび飯をあたふるよ鰹ぶしを入き肉味を加ふ猫ハ常よ厚味を食とする時ハ鼠をとらび猫ハ麥をさきて味噌汁をうけ與ふべしその他の食をあたふべからず常よ肉食ふあらハすまば肉かき時ハ必他の家よいたりて魚肉を盗めり人を養ふも亦復あらり

雲萍雜志

鮪と真黒と説

石原正明

人を養ふも云々一向極めてカあり一篇の精神

あらぬ物ハ、同物
あらぬ別物といふ
事

さばかり見まき
たき云々、前をうけ
て後ハ應じ、一篇の
肯綮

同物よて云々、漁人
の答をもて前の一
物と心得たらんも
云々の説を收結せ
る手續よく味ふべ
し

鮪と真黒とも一物、二物、詳ならず、いとよう似て
あらぬ物よて、これを鑑定する方、魚市の秘説ありと
いふ、其品の高下、いとへをさし、も異ならずとぞ、さ
ば、かりにまき難き物の品の高下、さへさかむずら、一
物と心えたらんもなでふ事、あらむ、陸奥は物とさ
り、一頃、金華山のおたり、大原といふ里、やどり、一
家ある、トら漁人よて、其頃、一びを取るといひの、一
る、まびと真黒といひ、づく、異あると、ひ、一、を同
物よて、春鮪といひ、秋真黒といふと、ことへき、
年々、隨筆

孝養の訓

中邨惕齋

惕齋、名ハ之、欽、字々敬甫、通稱仲二郎、後、七左衛門
と稱す、惕齋ハ其号、阿州侯の儒臣よして、京師よ
住す

孝養の心ふらく至まる者ハ、聲なきは聽き、形なきは
視て、意よされど、志をうくと、禮の教よ見えたり、親
の心よきざせる事、いまご聲よも形よも顯きぬされ
し、之を視聽く様よきとり得て、其意よされだちてか
あへ、其志をうけて行ふ、譬へば、いまご物言ハぬミど
り子の心よ思ふ事、親の心の誠より推測まき、子の心
よ正しく、合ふまどけきど、大様遠らざるが如く、

心は誠ある云々、上文の心の誠より云々と對するべし、宋の范祖禹云々、暗

子の心は誠ありて、孝を致さまく思ふこと、須臾も忘る、ことなきもの、親の側にある時も、離る居る時も、其未だ知らなきざる聲形、常に耳目の間にある故に、能く意は先だち志をうくるあり、も其聲をき、形を見て、さて之に従はんとする時の、既におくきて、意も合はざ、志もとげ難き所あり、況んや離る居る時も、既だ聲形はあらなきても、志らで打過ぐる事あるべきをや、依りて孝子ら、心は誠あることを、至まる道とするあり、宋の范祖禹の曰く、子能く親の心を以て心とをる時も、孝ありと、心誠は孝ありて、毫もこ

と云々一段と應ず

為し思ふことなきもの、其心即ち父母の心あり、凡そ親の愛敬し給へるもの、我も亦之を愛敬して、おれ後までも永く念まば、是の親の心を以て心とするの義あり、 姫鑑

財訓

貝原益軒

財を用ふるは、心を用ふると、用ひざるとは依りて、財の費の多少、甚ことあり、能く心を用ひて、無用の費を省き、ついでして約あるべし、おろそかにして、多く用ふべからば、たとへば養生の道は、物ごととすくなく、をよとす、酒食を少くし、色欲を少くし、言と怒

緊密なる内云々前段能く心を用ひて云々の一節一應は人を使ふ云々用財は關係なきが如くよして却て大は關係あり餘波の妙處味ふべし

あふさきさるさハ左右まさハ往來おどの字を訓し又縦横の字をもよめりこまらよて其意をく

補とを少くするの類あり財を用ふるも亦此の如くおるべし物ごとく多く用ひ過ぐすべからば然まども費を惜むことあまり緊密は過ぐまば吾心を苦しめ人よ害あり緊密なる内よゆるやうあるがよし人を使ふも亦此の如く日々少しのいとまもあきやうよ使へば人苦しめて其處を得ざし少しいとまある様よ人を使ふべし 家道訓

樂訓

貝原益軒

人の心の内よもとより此樂あり私慾行はまざれば時とあく所として樂しうらむと云ふ事あり是本性より流れ出る樂あり外よ求むるよあらば又耳が目口鼻形の五官外物よまどをりて色を見こ音を聞き物くひ香をらぎうごたえづうある五の目ぞ欲すくあくよきわどに過ぎざればあふさける事毎よ樂しうらむる事あり是外物を以て樂の本とするよあらば又外物よふまて其よろこむべきちうらを得て樂をためていで来るよもあらずもとより人の心の内よ生ま付きたる樂あるゆゑ外物よふれて其助を得て内ある樂さかんよあれるありたとへば人よもとより生れ付きたる元氣あり是生命の本ありさ

まじ飲食衣服などの外よりの養おけまじ、うゑこゝ
えて元氣をたもち補き如し、外物の養を以て内
の樂を助くるハ、外もある飲食衣服の養を以て内
る元氣を助くるが如し、又心の内は此樂あれば、飲食
などの外のやゝおひも皆樂の助とある、まじのミま
らずあしたゆふべ、目の前まじちとる天地の大なる
まじぎ、月日の明らけき光、四時のめぐりゆく序まじ
まじがへる、折々の景氣のうるまじきありさま、雲烟の
たおびける、朝夕の變態、山のと、まじまひ、川のおかれ、
風のそよぎ、雨露のうるまじひ、雪のまじよれた花のよそか

ひ、芳草のまじうゑ、嘉木のまじげまじる、鳥獸虫魚のまじぎ
まじで、まじべて萬物の生意のまじまじる、是をもてあそべ
まじまじまりまじき樂あり、是は對をれを其心を開き、其
情を清くし、道心を感じおこし、鄙吝をあらひ盡まじべ
し、是を天機は觸發すと云ふ、觸發とハ外物まじふまじて、
善心をおこはをいへり、是外物の養をかりて内の樂
をたもちくるあり、樂訓

修業の心得

松木直秀

直秀、初名ハ猶秀、通稱善右衛門、琴園、又飄邈屋と
号を、駿河府中の人、慶應元丑年六月歿す、享年七
十五

此文用語平易よ
て、句法方正、初學此
等の文を熟讀せば、
大に裨益あるべし、

何○事○は○依○ら○ば○業○は○就○き○て○怠○る○べ○から○ば○成○効○は○急
ぐ○べ○ら○ら○ず○唯○常○は○心○を○此○は○存○を○べ○し○成○効○は○急○ま○ま
ば、退屈の念生じて、事遂げがたく、業は就きて怠らざ
まば面白く、其間生じて、成効の全れを致すべし、學
問の道と事業の中よても最も難きものなまば、最も
此處に心得なくともあるべからば、然るは學生の常と
して、初めの程は随分能く勉強をまじも、漸くよして
退屈の念を生じ、其甚しければ、終は廢學するよも至る
ものあるは、畢竟成効を望むの急なるよ由きり、大工
左官の如き卑近の業をら、尚且數年の年季を入きて、

之を修むるよ非ざまば、其大工あり、左官あり、一人前
の職工といふある事を得ざるよあらばや、況して人の
人たる道を修め、士大夫の師表するべき學問の道よ
いて、さも容易に成就すべしものあらんや、元來人の
精力に限りあるものなまば、非常は勉強するは、却て
非常の怠惰を生むる基ともあるべし、故は非常の勉
強を要せば、眠食常を失ふことなかく、職ある者ハ職よ
従ひ、産業ある者ハ産業を治め、さて後暫時よても暇
ある時、心を專壹よして、修學をべし、朝よ温めて夕よ
冷よことなれば、昨よ勤めて今ハ怠ることななき、此

眠食云々前の唯常
は心を云々と對
て味ふべし、

餘業云々一句、專修者ハ勿論かる意を含蓄也、事業中云々の一段、全篇を結收して最も力あり、何事の字、冒頭何事の字と正は相對也、

の如くよして日々變むることあく、月を累ね年を積みて、已まざらんハ、餘業は學ぶ者といふとも成學の効驗必見るべきあり、事業中最も難いと云る學問の道よして既ハ然リ、然らば其他の事の如き、此心得をもて勉むるハ於てハ、何事をハ果さばらんや、
琴園漫録

書簡類

長澤純平に贈る書

伊藤仁齋

仁齋、名ハ維楨、字ハ源佐、仁齋、棠隱、古義堂等の号あり、和泉の産よして京師、堀川に住、長寶永三戊辰歿也、享年七十九

改歳之吉、目出度

山城守様、愈々御機嫌能く、起案て、瓶カ指上り、瓶カ宜法披露、有之ハ、様頼、瓶カ次貴様、御全家、瓶カ茲、瓶カ為、瓶カ折角、瓶カ保、瓶カ此、瓶カ無事

尤存候ハ、第一、存候と云ふ程の意不

肝煎ハ此時代の語
よりて事は主として
周旋を有る意今日
幹旋ふといふ程の
語あり

吾輩の留居氣運を成間教の門下中皆に望むる
事其元門下中皆に望むる由内各在書中
に依りて大悦不遇とある波邊惣太事也
肝煎其具兩意元とて皆に二あり
以て致感心し事
亦其間杉才次郎生事也
以て肝煎其方也
不御令大悦何とぞ退村
其屋住様とある事
に依りて
お溜りといふ早に左
右に致し様也
傳へて
尚ほ
後書に忍惶謹言

正月七日

於に間杉氏事同教ハ少技持て生る有る在り

小笠原殿へお溜りといふと女に委細をまて
て居
此迄也

弄璋之慶ハ男子出
生の慶といふ事詩
に乃生男子載履之
林載木之賞載帶之
璋
遅く承候て延引と
ハ祝儀を申入る
事延引との意あり
弄璋之慶ハ男子出
生の慶といふ事詩
に乃生男子載履之
林載木之賞載帶之
璋
遅く承候て延引と
ハ祝儀を申入る
事延引との意あり
拙者數多喜音りて案内
能存と雖も保養
第一に此生れ餘り暖
之仕事りし事惡敷
又眠
おと必新綿新綿を
懐て被りし甚
忍敷く食
ちや食りし時分
いまだ甚飽り
様之仕事
同前
此生れ以惡敷く委曲
期後言也
旧冬格月十三日
之由状お達り以上

名家手簡 以下同

④立原甚五郎に答ふる書

柴野栗山

栗山、名ハ邦彦、字ハ彦輔、栗山、古愚、五峯山房等の号あり、讚岐高松の人、幕府に仕ふ、文化四年歿す、享年七十二。

新年之法賀書系相見付、弥中萬福、庶及福、其成事
蒙賀、若拙、依旧、方、又先、確、一ツ、まね、ハ、言、子、六
十六、大、二、ね、来、リ、ハ、由、情、然、ハ、下、ハ、舊、年、一、五、四、月、中、付
由、ま、新、年、十、二、百、お、進、上、驚、入、年、毎、ハ、正、去、是、金、く、貴
隆、の、人、ハ、由、疎、失、ま、冬、ハ、水、門、生、共、於、情、毎、ハ、如、此、像
有、之、ぬ、何、とも、忠、愼、を、奉、り、旧、冬、こ、う、書、並、春、水、ハ
一封、早、ハ、ね、進、吉、災、報、ハ、此、間、差、出、春、水、より、ハ、一、封、ハ

届、上、ハ、此、節、由、入、年、下、ハ、係、与、事、存、以、武、元、生、木、園、ハ
歸、り、來、ハ、後、便、ハ、無、く、以、定、而、冬、事、ト、ま、為、ハ、歴、史、微
及、烈、祖、業、績、之、事、以、知、付、何、分、ハ、也、宜、事、願、水、志
水、翁、い、う、様、左、様、も、有、之、以、惜、ハ、人、^{ヨク}年、を、よ、き、ぬ
儀、歎、息、付、ハ、國、史、法、脈、正、心、勞、ハ、由、由、尤、事、奉、ハ、名、志
為、天、下、萬、世、骨、ハ、折、ハ、様、事、希、人、志、是、ぬ、由、辛、勞
被、蒙、ハ、由、い、う、様、左、様、之、事、ハ、有、之、事、察、彼、由、出、府、ハ
志、是、ふ、リ、ハ、由、一、入、由、中、リ、ハ、事、如、新、年、俗、多、帽
給、早、ハ、相、故、付、ハ、夾、言、由、自、盡、者、一、ハ、事、如、上、尚、期、水
日、ハ、忠、愼、謹、々

正月十九日

⑤ 嶋崎岩城兩生に寄る書

皆川淇園

淇園、名を願、字は伯恭、通稱文藏、淇園、節齋、有斐齋、吞海等の号あり、京師の人、文化四年歿、享年七

四十

爾來絶音、問津者寡、冥念卿佳、安在成、在座、我丈夫平安、在府、念之、此、之、貴、文、久、之、誓、留、愛、之、近、來、海、内、事、多、上、諸、王、之、言、より、微、命、有、之、禮、記、春、秋、之、注、等、も、心、愈、之、事、一、向、幸、寸、暇、と、願、終、了、閑、飲、吟、加、雌、黄、了、之、便、返、上、在、入、多、一、つ、成、名、尚、宏、春、陽、樓、述、之、

⑥ 古山常助に答ふる書

中井竹山

竹山、名は積善、字は子慶、竹山と号し、隱居して、深翁と云ふ、通稱は善大夫、大阪懷徳書院教授、文化元年歿、享年七十五

貴書校相、是、水、如、高、論、盛、寒、之、亦、在、座、一、共、愈、仰、清福、之、成、在、座、珍、重、之、至、幸、也、一、夫、夫、年、異、事、了、致、成、食、之、在、安、意、一、つ、り、寔、之、當、年、と、珍、貴、源、之、在、地、も、蘆、山、彌月、之、流、ふ、り、し、由、事、成、て、悲、し、此、地、も、川、筋、皆、凍、合、累、日、通、船、無、之、程、之、儂、廿、年、已、前、之、傳、之、事、と、て、以、為、在、是、廻、在、文、に、し、亦、幸、也、一、序、の、在、也、一、拙、夫、老、年、之、及、以、出、以、難、澁、表、向、之、出、初、速、惑、之、付、當、冬、致、隱、居、測、菴、家、督、お、續、致、せ、し、尤、氣、力、も、何、も、衰、へ、一、程、之、儂、也、一、

又按中教授謀習れ之像不相更是之通りお務
此分堅固之語来へども右之儀之先之安心之語
之通り仍る名前もま面之通りお改中成字生暑氣
甚嫌ひ字々好物にてお同音之文字来て俗通之
為之也之相も認め之左様之承知之通り川口之安
伊三太退之成長之様子も宣布お見え之様此像
之儀事尚期来陽之承之忍性之云

十二月廿日

友人之答ふる書

釋 六如

六如、名ハ慈周、六如ハ其字、白櫻、葛原、無着庵
ハ其号、京師ニ住テ、文化中殿ニ享年六十餘

貴簡有是如仰新祿至限了祝之當年古孫為東都
之春之迎之成別之好儀祭ハ在禮袍無恙加犬萬古者
道之より、去年在東府後賜一書示深之其後之貴
之も不了上疎慢之其饒之より收當年ハ其言之
被来其御意師之兩三日之在逗留之由何事之
得拜略之敬横懐之右之其之在度如此之在
不

二月十八日

增島金之丞之寄ふる書

古賀精里

精里、名ハ撰、字ハ淳風、通稱ハ彌助、精里ハ其号ハ
久、肥前佐賀の人、幕府ニ仕ム、文化十四丑年歿

事年六
十七

薄暑清寧字智也昨日毎度出立り交不
相曉遠識減字 此會之文一覽佳し交存し

ハ而連も多く且文章も佳分可親表幸しく此座在
右稿本則借評工者上と交先達も粗沙汰し裁
ニ定り以白雲社約あり兎爾先互ニ點竄推致を極
ト上る先生ハ呈し其上を加筆し様を見り以供世人
之指指を不収是も目々文富し鄙陋なる各々成家と様
之勢なる始終其非を知らざるニありとありる交會之は
連先以此大愚弊を破らせり交と交言作は之在勞

推敲ハ、階唐嘉話云
賈島馬上得句云鳥
宿池中樹僧推月下
門推字練之未定不
覺衝尹時韓吏部權
京尹左右擁至前島
具告所以韓立馬良
又曰作敲字佳矣二
れより人にも相談
よく按むるを推

敲と云ふ

先學臺遠直直なく諸作を直點削り成しお私方ハ是
より其上を思見しお再訂して侍し 學臺のハ墨と云はる
拙抄ハ未して侍し 皆筆供
茲に侍し於思も有しり此申開りし今日も此談
り度ハ一昔出立席に程程計一間に成り上り此會ハ
諸人之文も下り不足しお或も其勞を承ひしり
らるるをくハ革時獎し第一若此ふと有しり此
諒矣 っつり以上

四月廿二日

友人に贈る書

頼 春水

春水、名々惟寛、字ハ千秋、一字ハ伯栗、春水又霞崖
と号也、安藝竹原の人、國侯に仕ふ、文化十三子年

歿七、享年七十二

稍覺長閑し貴家古安福を賀在此間と古赤飯を饌
 下遠方勞費介し不地感有在當日の並言無滞
 在信て上茶と茶存明日を例時前に出学て仕事有
 昨日自黒澤へ来しお禮工為勝子次才由こへハ十吉
 工然との事と直社上仍之七日未崎へ其在て中達事何回
 人を廿二日也然と申来し(い)も是も定日と便て申来
 事と申来し回人も明日一日といふて然上(い)も申来し
 申し自々の通り回人の貴家へ来り私を禮うしと申
 し様て仕裁又も様如何と思ふと申人とも昨日外へ

自今の辭と通常今
 日以後と云ふ意は
 用ふ、さるをこ、ま
 ハマハカ多といふ

程の意は用いたり
 土地慣用の辭なる
 べし

候し權て仕ぬ其故不苦しり申り越たり清夜

正月十一日

尚く先日申上り客と申し合をぬり申り自々取
 知りし申上り申布し交と申先く少く辰
 端しおた溜大交仕しぬ然も冬子と云業か如何
 先もお禮後やはり仕心得といふて出て申は會
 議もお溜在りて申志らとてたり

● 姫井仲明に寄せる書 西山拙齋

拙齋名ハ正、字ハ士雅、拙齋、至樂居の号あり、
 備中鴨方の人、寛政十年歿、享年六十四

好便一筆、啟上仕、時下向寒伏惟、帳下、是、安

返璧、左傳曰公子受
殽反璧とあり、公子
ハ重耳を指す、徐氏
筆精は故事重耳の
事と本づく、今人蘭
相如完璧の事と云
ハ誤る由云ハ

寛とて來て居る恭とて去るを弊唐無急心擁護等
化るる皆居りし實に前月と來る當ら連白蒙清海
殊更種とて助力の儀に頼り上別る事存し本月
三日自行寓歸宅五日禮卿未願九日立園と歸ら
能毎談及 言又し宜敷り上様り託り詞章も吟唱
分題も少く有之し一在大方ハ登壇劇誌とる在流りし
一歎可祿全貳本在也引此度返璧傳之久と留置し一も
核訂不及三之一在竟業ハ化ハ河清に僕とる在也
呵し五月抄きハ備言説と神邊にも遣りしハ電
説後品と在返りしハ米説云々不苦しハ在許

河清可俟、王子弁拾
遺記は丹丘千年一
燒、黃河千年一清、
左傳は周詩有之曰
俟河之清、人壽幾何、

借し下度事恐し先日偶説し琉球大鳴祝中の卷自
禮心差儀一説琉國風俗及唐土之事も披き面白
き事右具し唯し書家と好む事在座一讀過とて
掩卷茫然と在座
一頼千祺ハ此間返書ハ末言見ハ一書ハ差儀ハ在稿
達仕と定る去冬と返稿との有在座と在後と罪全
在云と老懐千万在容赦とるハ當及し在書稿と
即日神辺便に附し轉達とる七夕は在座と様と
来し来月又好便と在座と若く貴稿と速とるハ速
稿上て仕し事ハ致後便し時ハ在座謹言

閏月念六日

⑤ 友人よ答ふる書

宇佐美瀧水

瀧水、名ハ惠、字ハ子迪、瀧水ハ其号、通稱惠助、上総
の人、徂徠の門下學び、雲州侯に仕ふ



昨日も兼囑じつゝ交化遠即答不付、愈在按福恙在
仕し然も清風樓序在、一決て成就由と仰り、然も目取
小子七日死出し、留守ハ在人と仰り、事もやと認、重々
頓首

三月三日

⑥ 巖垣章藏よ寄くる書

赤松滄洲

滄洲、名々鴻、字ハ國鸞、通稱ハ大川、辰平、播磨
赤穂の藩士、享和元酉年歿、享年八十一

時下暑濕在、揃在成蓋在、清健之也、來在在、恙在、重々
運旅病中、毎度在尋、下辱幸甚、彌、午比諸症、尙
退治云々、日飲食も相應、仕三五來信、草硯、仕合、託書
此神、こゝ先又暫存、餘息、事、と、好、上、言、外、在、無、言、
と、る、教、に、餘、り、在、望、言、仕、に、在、被、在、左、者、ハ、上、度、在、去、
多々、病、瘵、怠、慢、在、言、然、て、被、下、教、
近來、在、新、著、も、在、在、と、く、有、見、て、仰、付、し、愚、先、も、將、來、日、
數、ね、迫、し、在、拙、著、日、と、進、一、の、脱、稿、と、存、在、在、他、日、一、度、在、
次、し、未、遊、辱、疫、傳、殊、甚、不、冬、後、ハ、在、在、有、怒、可、と、下、教、

あゝ、洋々

五月十七日

⑤ 三宅尚齋に贈る書

佐藤直方

名々直方、通稱ハ五郎左衛門、字号共ニカシ、
備後福山の入、享保四年歿也、享年七十一、

鈴木重五、帰信ノ節、在状有欠、在家内、在事アリ、彼等ノ様
子、至五、物語承知、殆重、至三月末、之、内返、至、至、
其、後、先日、三輪氏、と、付、拙、考、世、意、死、在、重、五、
上方ノ様子、承、知、一、見、心、比、在、神、田、彌、三、郎、
中川平助、より、拙、考、方、と、云、云、

一、先日、より、陽、明、文、録、傳、習、祿、見、
一、兼、而、存、
一、
一、

歸郷之節御状ハ、歸
郷之節被托候御状
との意あり、

三輪氏云々ハ三輪
執齋の事あり、執齋
ハ即直方の門人、
一、初、め、朱、學、を、奉、
一、後、陽、明、學、
此書簡ハ即ち其轉
學の事あり、

古希の希ハ、稀の略
字あり、

このひなき論説も、在論孟の中、つゝ、事、
有、
傳、
一、
一、
一、

六月廿日

其、元、
一、
一、
一、
一、

吉野於屈折に存出孫右衛門が合羽を著し事
成ぬし其様三輪戈をとりおりの患を一樂と
存し

一松平甲斐守殿内藤生松右衛門と一人有るは餘
程博識にて文字も子細に味有りと由程學を志
し由助字おとの事餘程心留し採りて存
知し哉

一善藏へ遣し不審き其元へも善藏より遣し
し裁取し不審き事欠えりし畢竟王氏の文字
に感所有る文才疎る存し如何

善藏へ即ち二輪執
齋あり

一文を郎へ一傳り入度し由意得て云らば拙者も一
ま状候しへりしとあり三世に知音にては故誅
不存し此を在り閑せりし以上

④友人よ答ふる書

稻垣白嵩

白嵩、名も長音、字へ稱明、通稱茂左衛門、
春臺門人

此紙お欠此間も亦出た早し得た云被大恨し不
正し天氣お直れしへりも強し安全を祈りし然も最
京都へ由登りし由用事有る節句邊に友は由由
辛勞とあり由取返し由必し由味乞由出し及りし由因
事由代直へり由付由由由承知し文集下直し

本も直仕立させしを遣由強頼也

一上方用事もしつてし進名に仰せ給ふ折角正
な度て元成迄以上

二月廿四日

⑤安積覺兵衛に答ふる書

土肥霞洲

霞洲名ハ元成字ハ允仲俗稱源四郎江戸
の人白石門人寶曆七年歿也

前月廿四日之書簡一昨三日お達被相見し先以書
氣と帝と様と一と也強直健劉上成古勅上各様
幸甚し先頃も直片簡と交被し取給貴様も
直引在来し借花も並平野氏へし直主通し述お

達しども彼返書未お来し相待一所の由答りしを
怠慢し蓋不知お謝し借花方より認察在直様付直主
と一なる名姓し付則と般ある並平野氏へ一程お
進達し来命し板樓し致水知し

一尖西白石碑銘おし像上依りし被葬地ハ直當地
草の寺地にて直在直中し石碑おと遺りしもの之
遠く借ふべ地取ても年々少く付筑後守領地ハ内
鎌倉山中に碑を建し存寄る碑銘ハ室鳩
巢にお頼様し強しお入直次し行状お返り依り
立てりし事とある不申し謹言し儀も拙子直言

山門人之私語をうらぬ事よりおがり白石
事生存あり

朝廷に官爵有る者につかぬ私語を議し
借犯し候もその成しをりし事と存しお止
白石勿齋れし号を用ひて事と存しお止
りし以上

十二月五日

於て都下浩穰之巨雜務増集いりて毎
日返答を運くお成し多罪くして蒙高熱い
上

觀瀾堂主に答ふる書

人見竹洞

竹洞、名ハ節字ハ宜卿、通稱ハ友元、竹洞と号し又
崔山ともいふ、林道春門人、幕府に仕ふ、元禄九子
年歿す。

昨日を市に就きし事なき如御此百言より永代にましま
しくと申す一候留も業先志りしやめて成
得業意也

名卦は古儀へ進りし事を上へ款りし表をまり候
も然る大きも如はのうふ仕し先こま程より御字を
きて元禄の事をも字置り度と存しりやせし一候も
先其元は古家置し候し一候何時もお借し仕しをり

きてつねりの様あるも能くしる事察して其様上よま
付立生れ

去る物昨日心機へ是より相違ふ事しよ出来候とて
殊の外きも存ぶる一返りも其の二一お見い
ささる初らた父も別紙も書付しし心事者面
に上より上より

五月廿七日

友人よ寄せる書

稻生魚彦

魚彦通稱茂右衛門下總攝取の人江戸に住し縣
居真淵の門人傍ら画を善くす天明二寅年歿也
享年六十

仰平安至悦當境無異を以滞留仕し画いりて成
り此此地に外行きて在り合古登を待り然る
大浦牛蒡種怨望と致し仁有るを採り其家
来大浦の産るぬりし何卒四五粒も能く留り
寄らせし惠よりし概希少許にて能く居りしや
このまき事ふつら無切を望し居せし被成りし
りし若し頼りし夜如きこと産小懐にお認候の意
まよろしくは説工はつし仰受ふ様古舎兄様へ
まよろしくは説工はつし仰受ふ様古舎兄様へ

十月十一日

岡野庄五郎と寄る書

龜井南冥

南冥名ハ魯、字ハ道載、南冥ハ其号、筑前姪濱の人、徂徠門カリ、文化十一年歿ス、享年七十二、

時下春寒未退、一古愈、其安全、成在座、多、大蒙
直像、幸存、下、拙、幸、恙、相、寄、居、リ、然、テ、志、志、ハ、以、瑞
管、之、来、下、在、返、之、延、引、仕、ハ、付、至、冬、又、ハ、在、訊、問、之、依
付、名家、之、書、多、ク、種、々、中、速、贈、之、下、在、厚、意、之、程、感、佩
之、至、幸、好、之、志、夾、以、来、在、當、地、麻、疹、流行、一、向、之、坊、寸
隙、在、存、在、望、音、大、皆、ホ、意、リ、以、決、之、在、甚、意、を、志、ス、ル
ホ、ハ、在、志、之、前、便、賜、リ、ト、書、画、之、分、ハ、衰、少、等、付、付
時、ハ、展、覧、仕、レ、此、節、在、待、作、律、絶、二、篇、千、萬、亦、お、心

八月廿八日

某氏藏弄 以下同

介堂と答ふる書

岩瀬蟾洲

蟾洲、名ハ愿、後震と改む、字ハ百里、通稱愿三郎、後
修理、幕府の臣、從五位下伊賀守又任、後肥後守
又轉也、蟾洲と号し、又鷗所と号
也、文久元年卒也、享年四十四、

拜見、態、ハ、勞、矣、何、ホ、入、レ、然、ル、ニ、又、子、外、不、来、送、憾、ハ
何、卒、在、序、ニ、伺、成、ト、セ、夕、々、不、在、明、白、在、病、家、ニ、相、故

六

豊藤五十助と答ふる書

林 述齋

述齋、名ハ衡、字ハ叔統、一字ハ公鑑、述齋、蕉軒、天瀑
等の号あり、知字ハ熊藏、大學頭と任、晩、ハ、大内
記と轉也、天保十二丑
年卒也、享年七十四、

拝読如示新様此間意目出度幸存春来然違来と老
面も不申しひき此節夫寄こしととも弥在安福と成在勤
弥契と在事と在在と物も冬在頼物と事折角と在下
と慶折悪毒姑先卧病に付在修と在米送懐と事と在在
先日縁大を以て僧帰るも一在在と付縷くし在成面
入在在と在像と在在と来二月四日在持成も一在在の在
事一在在つり一在像と在在と毒在在と一在在何分と然
幸在在右と在在とと草卒如はと在在と已上

正二十二

当し料峭在自在て成し二の四九時より

鴻鯉ハ書簡のこと
あり

仕し兼し松岩寺和尚より在閑達上下我昔の詩句と在
在字在示持と成し由珠と遠在花香とやらんことと在在
現社下と在慚愧と在在在在珠と日来鴻鯉在来
在在付度在在子示不事と在在と在然最早返り及
老衰在在在在よくの出来不りしととも在在命押
瀧在在目在和章二首是又在喚吐と在在我昔も在
作りと在覚悟と在在在ととも在在著信ふりし成在在
現て仕し松岩寺一在在在在在在在在在在在在在
在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在在
お

二月廿五日

①大槻磐溪に寄せる書

後藤松蔭

松蔭名ハ機字ハ世張松蔭ハ其号大
阪の人

お啓秋冷お成り

絳帳の上を揃ゆ多祥古教習は来し半と半は
履し抱先頃素腰辰と痢水の大ニ無古心配有中
引取苦生仕居し虫猶快故之上不お替お取し奉
願上座○此節富森松出坂時々面話お樂り
先と縁吹古心配を然し在し寸楮鳴謝しと
隨時自玉加餐不乙

公用入来し座有し水ニ付必竟朝之内
座し百五ツ時より九時と之間ハ在都
合決第ニ
よ取しくは在し為念此在し中述置し事
座し以上

②加瀬通義に答ふる書

片山兼山

兼山名ハ世璠字ハ叔瑟通稱ハ冬藏兼
山ハ其号天明二年歿也

昨日を在貴信しし素不在して不接高儀
送恨し至
事好し陰晴不立し天色は在し一在
愈古佳儀を来し
動靜不厭侍し鄙生才事ハ在し
古少及も下し
事存し跋胡蹉跌中懸空し
下は併薄命に廻り

跋胡ハ詩經ニ狼跋
其胡載震其尾毛傳

は老狼有胡進則躓
其胡退則踏其尾進
退有難とありて進
退の窮する事はい
ふ
躓 踏書の疏は見ゆ
こ、よてハ世事の
失敗を云へり、

あるべし 彼等と事存居し 祈に在るに無中 遐弁 芳訪
中し 在感荷 不翅 幸也 佳若 二袋 之惠 又 誠不
已し 晝之内 之念 業て 間隙 之無 在在 一を 在光 来りて
も 徐々と 話 舊し 事も 成 通し 百は 見合 せむ 未 晩方
在尋 之り 操 幸待し 心曲 ぬ 叙 之り 是と あり 録し
先 昨 日 之 在 沈 之 如 此 之 在 之 あり

三月十日

名家手簡

友人に答ふる書

藤田東湖

東湖、名ハ彪、字ハ贊卿、通稱虎之介、後誠之進と改
む、東湖ハ其号、水戸の藩士、安政二卯年歿、享年
十五

芳墨波ぬ 允在 如 諭 嚴 寒 之 節 愈 在 安 健 之 成 在 起
居 幸 敬 賀 以 雅 生 幸 異 在 幸 上 乃 憚 在 安 意 可 致 下 亦 先
以 在 出 府 中 之 得 寬 晤 大 幸 不 過 之 幸 存 之 併 甚 勿
之 仕 合 失 敬 不 少 在 海 外 之 在 之 在 歸 京 後 亦 絶 在 疎
濶 中 沢 幸 在 在 之 委 曲 芳 諭 之 趣 一 葉 之 面 目 泰 仕
合 幸 存 之 拙 著 入 在 沈 之 中 汗 顔 在 事 之 在 在 神
道 之 終 終 上 中 下 三 卷 之 立 稿 初 卷 脱 稿 之 在 之 在 猶
役 凡 蒼 之 吏 之 在 成 先 之 中 絶 仕 居 之 一 也 朝 暮 心 頭
之 不 離 在 在 之 留 間 之 偷 之 来 夾 之 之 是 也 他 役 稿 廣 之
四 方 同 志 之 正 之 乞 ひ 之 心 得 之 在 在 之 来 示 妙 世 之 神

武之道は同意志願に由りて神を教へ武を奮ひて
 一に其に舉世佛に倣へ君文を弄り世の中は徒太道興
 隆安心不仕し一も在功消長に理偶然あり一も一
 氣萬物に夾を回し如く各國同志に士同心一カ心氣を
 技植へ綱常を維持仕り神妙の大道六合に光被
 在儀も散て六ヶ教事にも有るる免も角も自信
 愈篤醇誠字□□心氣を涵養仕度不及日夜心然し一も
 壯斷豪氣不除や、もまきハ憤激に餘宋人助長の弊
 を不免慙愧仕し叔助長に付一玩ね認し浩然説し其
 文此節夜中杯版指仕其大意世此中の人浩然が

亞聖ハ即ち孟子の
 事なり、

一ハ何れ豪放不羈の操に心得遠ひ亞聖の意に背りハ
 勿論注家の意にも戻れ是は故く不讀書に弊不足
 論し一も氣質高明にて世の齷齪を慨嘆し人杯ハあ
 くい一り此浩然が害をか一りも不が半陸杯あ
 ては風を不夷し留説を立止事ニ在れ浩然に氣天
 地之間に塞るとり事容易し見し時ハ夸大の言に近
 き極に在存し交養實ニ工夫し一も初氏不欺我事ハ
 大學に信福又ハ心廣體胖中庸に至誠不恥於屋漏
 其外仁知勇不憂不惑不懼云々即醇乎たる光昭正
 大に氣にて集義所生し在存し大酒を飲し人を忌口

一其外豪放不羈の行ゆめ、集家といふ不存跡たる後
悔と歎と氣餒と様にて、世俗の不謂浩然なるものたま
真の正氣を害するの理と申事、を認り、み敵と先生
長者と云さんと、ハ無之とも脱稿次第正を乞ひ、
ツ大意は、古お淡とお忍し折節俗事帽集、閑草期
後、鴻在以上

十二月十三日

某氏藏并

⑤ 某の答ふる書

頼 山陽

山陽、名ハ襄、字々子成、山陽ハ其号、通稱
久太郎、天保三辰年歿を、享年五十三、

其疎活と交、勿得兼、猶必面披、酒飲、然在佳、を、
其意、

尤展成樂府を召、承及未一、見何卒と存居、と交、
如獲、披壁、古怨情、年詞、て、今春、を、何、も、待、と、
の、も、然、ハ、世、と、嵐、山、ハ、一、奮、性、と、古、賀、穀、中、江、戸、
上、来、と、道、遂、追、花、同、醉、花、屋、と、は、る、其、詩、と、も、赤、み、
見、せ、と、唯、此、一、首、於、相、面、と、
謝、道、と、如、此、と、
頼、首

四月二日

尚、と、あ、三、日、中、いつ、て、も、取、と、ま、ら、
と、様、と、
山陽手簡

日用文鑑下卷終

明治十六年十月十二日版權免許
明治十七年二月 出版

編輯人

東京府士族

小中邨清矩

下谷區西黒門町十七番地

全

静岡縣士族

中邨秋香

麴町區三番町七十一番地

出版人

東京府平民

福田仙藏

神田區通新石町廿一番地

